

# 音楽の世界

## 目次

<b>論壇</b>	三善晃君のこと ～同世代の同業者から	助川 敏弥	2
<b>特集</b>	近代ヨーロッパの社会と芸術・諸地域編 ハプスブルク帝国とボヘミア ～『きよしこの夜』を通じ「ナショナリズム史観」を問い直す～	小宮 正安	4
<b>追悼</b>	諸井誠さんの死を惜しむ	助川 敏弥	9
<b>リレー連載</b>	未来の音楽人へ(8)	村上明美	10
<b>小特集</b>	若い会員は語る(その3) 自分自身と向き合う 私の現在の音楽活動について シャンソンとの出逢いと現在の活動	北村 真紀子 大矢 絢子 神田 麻衣	
<b>連載</b>	<b>音・雑記一ひなの里通信一</b> (62) . . . . .	狭間 壮	20
	<b>名曲喫茶の片隅から</b> (43) . . . . .	宮本 英世	22
	<b>音盤奇譚</b> (48) . . . . .	板倉 重雄	24
	<b>電子楽器レポート・連載-10</b> 【日本電子キーボード音楽学会と第9回大会】	阿方 俊	26
	福島日記(24)	小西 徹郎	28
	明日の歌を～楽友邂逅点(第9回) 渡辺宙明-2	橘川 琢	30
<b>報告</b>	CMDJ2013年オペラコンサート『愛の葛藤』	実行委員長	34
<b>コンサート評</b>	日本の弦楽オーケストラ傑作集 その過去と未来	北條 直彦	36
<b>追悼文集</b>	作曲家 三善 晃氏を偲んで	会員有志	38
<b>投稿</b>	助川敏弥氏に物申す! 忘れられない音楽家	ロクリアン正岡 小西 徹郎	40 41
<b>コンサートプログラム</b>	<b>若い翼によるCMDJコンサート 6</b>		44
	CMDJ 会と会員の情報		54

## 三善晃君のこと

～同世代の同業者から～

作曲 助川 敏弥

三善晃君が亡くなった。10月4日。その前に諸井誠さんも他界した。こちらは9月3日。

このところ、作曲界の同輩、先輩の訃報が続く。通称、昭和ヒトけた世代。筆者もその一人である。乗っている電車の乗客が少しずつ減っていくような具合で寂寞とした感がある。

「歴史は主要な事実の列記である」、これはアナトール・フランスの言葉である。主要な事実についてはいずれ専門家が完備した記録を整備してくれるだろう。私は、同世代の同業者として、歴史の行間からこぼれるであろう事柄を記しておきたい。同世代人のリアルタイムの証言ということである。諸井さんについては、本誌に別稿を書くので、ここでは三善晃君について書くことにする。

このすぐれた才能の人は実に特別な登場の仕方で私たちの前に現れた。

昭和28年のこと。私たちは柴田南雄先生のお宅でシェーンベルクの十二音技法の研究会をひらいていた。その年の秋のことだった。おりから毎日コンクールの季節であった。私もこの翌年に応募受賞したが、その前年のことである。柴田南雄先生の研究会の帰路だった、たしか真鍋理一郎さんだったと記憶するが、「ミヨシという男がいま、コンクールのリハーサルでひどい目にあっている」と教えてくれた。どういう事情なのか知らないまま、本選会に行った。ヤマハホールであった。私は最前列かそれに近い席にいた。たしかピアノ・トリオであった。なるほど凝った音楽であるらしいが、演奏が要領を得ない。この曲は受賞したが、いま考えると、その当時まで日本では知られていない様式の音楽だったのだろう。最新のフランス音楽の様式である。演奏する側も見当がつかなかったにちがいない。私たちも同様であった。その次に三善君の音楽に出会ったのは、「交響的変容」-だったか、のスコアである。これは雑誌「音楽芸術」の別冊に日本の最新作を数曲、楽譜を掲載したものであった。このほかに黛さんの「涅槃」の第一楽章も載っていた。この曲には驚いた。こんな完備した、圧倒的なスコアは見たことがない。同じことを矢代秋雄さんもどこかで書いていた。心臓が止まるような思いを受けたと。こういう様式の音楽を私たちはそれまで知らなかった。緻密にして優美、完全。いま考えれば、これもフランス現代音楽の世界であった。この様式に馴れるまで日本ではだいぶ時間が必要だった。次が「ピアノ・ソナタ」。これも「音楽芸術」の巻末掲載だった。

あの頃、この雑誌は優れた功績を果たしていたものだ。完全、完備、しかして優雅、嘆賞するばかりの譜面である。なにしろピアノの単音の上に〈〉がついている！こんな発想はそれまで知らなかった。そして完璧にして優美の極である。しかし、この曲については、どこかヨーロッパの国で演奏された時、「この音楽はどこの国の音楽だ？」と否定的な意味でいわれたそうだ。この辺から三善作品の賞賛は私の中で幾分相対化されてきた。それまでは、ただただ感嘆するばかりであったから。次に、放送作品の「オンディーヌ」。優雅と洗練、「カラーの絵のような世界」と評された。それまで私たちは現代の音楽は不協和音と無調のどれかをとりこまねばならない、といういま思えば、奇妙な固定観念にとらわれていた。三善君はこういう固定観念とはまったく別の世界を提示したのである。

三善君は音楽大学出ではない。東大仏文科卒という異色の学歴である。こうした学習過程から、当時の作曲学生の世界の固定観念にとらわれず自由に成長したのであろう。ただし、この人は知識的な角度から音楽の道に来た人ではない。このことは大事である。当時も、東大、慶大、系の作曲家はいた。柴田南雄さん、入野義朗さん、など無調最前衛派、戸田邦雄さんのような知識派、中道様式の人たち。おもに諸井三郎さん門下のドイツ派の人たちである。この人たちは学問知識の側から独自の知識素養を積んでいった。三善君は違う。この人はいうなれば「音感派」とでもいう方に属している。その点では山本直純君とか和田則彦君の方の種類の人である。音楽学校系でなく、しかも、知識派ではなく音感派ということがまた意表をついている。事実、当時の自由学園の在学生の名簿に直純君と三善君の名前があるそうだ。そして、三善君はフランス派の勉強の人である。その点は、池内友次郎先生門下の私たちの同系列であった。

私は三善君と特に交際があったわけではない。ただし、同業同世界にいたためにふれあう機会は多かった。三善君は芸術家によくある孤立型のエゴイストではなかった。桐朋学園の学長をながくつとめたこともあり、東京文化会館の館長もつとめた。そして音楽分野では「現音」の委員長をかなりの期間つとめた。当時、私もこの団体の委員であったから、この間のことはその場で見聞した。団体をまとめていくには、頭がいいだけではだめである。人の話を聞く度量、幾つもの要求に配慮按分する才覚、そして面倒がらず尽力する奉仕的精神、それを総合した人徳。こうした面で、三善君は作曲家、芸術家とは別の大きな徳目と能力の持ち主であることを私は実感として現実に知ることができた。この人は芸術至上主義者ではなかった。時代は意外な人材を生み出すものである。全人的な傑物として賞賛と尊敬を心から贈り哀悼の言葉としたい。

(すけがわ としや 本会代表理事)

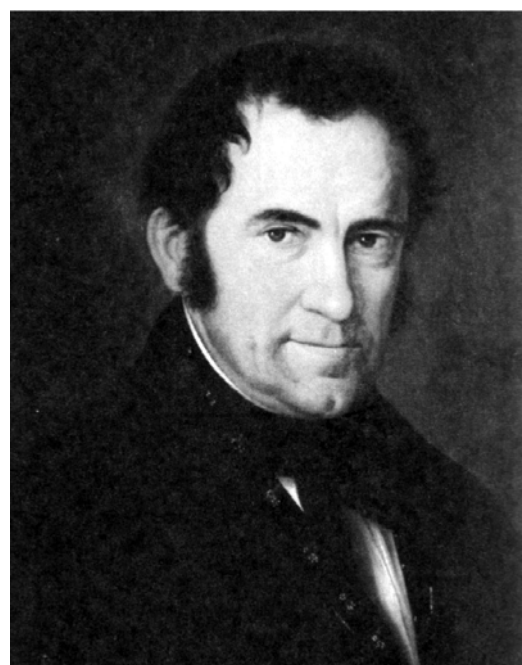
## ハプスブルク帝国とボヘミア

～『きよしこの夜』を通じ「ナショナリズム史観」を問い直す～

ヨーロッパ文化史 小宮 正安

### 『きよしこの夜』＝オーストリアの讃美歌？

讃美歌として有名な『きよしこの夜』。ヨーゼフ・フランツ・モール (1792 - 1848) の作詞、フランツ・クサヴァー・グルーバー (1787 - 1863) の作曲により、1818年のクリスマスに、オーストリアのザルツブルク近郊に位置する小村オーベルンドルフで初演された。初演のいきさつを簡単に書くと、クリスマスのミサをおこなおうとしていたまさにその時期、村の中心にある聖ニコラウス教会のオルガンが壊れてしまったため、この村で補助司祭として働いていたモールのテキストに、同教会の客員オルガニストをつとめていたグルーバーが曲を付けたという次第。(ただしモールのテキスト自体は、それ以前に既に成立していたという説もある)。



フランツ・クサヴァー・グルーバー

というわけで、この曲には何やら「オーストリアの讃美歌」といったイメージが付きまといがちだ。ところが、話はさほど単純ではない。まずオーベルンドルフ自体が、ドイツ（『きよしこの夜』が誕生した当時は、未だ

統一ドイツが存在しなかったため、正確に言えばバイエルン) とオーストリアの国境沿いにある。元々オーベルンドルフはザルツブルク一帯を治めるザルツブルク大司教の領地の一部だったが、この領地が1803年にナポレオンの侵攻によって解体された後は、オーストリアとバイエルンの間を行きつ戻りつすることになった。そして1816年、ミュンヘン条約によってオーストリアのものとなることが正式決定された。つまり『きよしこの夜』が初演されたのは、オーベルンドルフがオーストリアの領土となってから2年も経たない時期のものだったのである。

このように考えると、『きよしこの夜』＝オーストリアの讃美歌のごときイメージが、かなり安易なものであることがよく分かるだろう。じっさいこの曲の誕生に

関わったモールやグルーバーが誕生したのも、現在でこそオーストリアの一部であるものの、まさにドイツとの国境がすぐそばに控えているような場所であって、彼ら自身元々どの程度まで「オーストリア人たるアイデンティティ」を意識していたかは不明である。さらに言えば、『きよしこの夜』はその後様々な訳詞によってヨーロッパ中に広まってゆくのだが、とりわけその初期の受容先となったのが、チェコ人が多く住むボヘミアに他ならなかった。

### 「チェコ」か「ボヘミア」か

それにしても、今、「チェコ」ではなく、「ボヘミア」と注意深く書いてみた。というのも、現在「チェコ」として認識されている国は主に3つの地域から成り立っているからである。雑駁にまとめれば、西部のボヘミア、東部のモラヴィア、北部のシレジア。だがこれが単に地域的な違いかといえ、そうとは言い切れないところが難しい。歴史的に見ても、3つの地域ではかなりの相違が存在するからだ。

詳細は割愛するが、これら3つの地域の中でも特に大きな力を得たのがボヘミアだった。何しろ中世の一時期、時のボヘミア国王オタカル2世(1230? - 78)は、チェコ全体はもとより、ウィーンを中心としたオーストリアの東部から南部の地域を手中に収め、あまつさえドイツ人諸侯の精神的支配者としてのポストであった神聖ローマ帝国皇帝の座も狙ったほど。そのことに危機感を抱いたドイツ諸侯が、元々スイス・アルプスを本拠地にしていたハプスブルク家の首領ルドルフ1世(1218 - 91)をオタカルの対抗馬として引っ張り出し、それがきっかけとなってハプスブルク家がオーストリアに進出していった。

というわけで、「ボヘミア」といえば一時は非常に強大な王国だったわけだが、その後王朝の断絶や交代が起こり、1526年以降、ハプスブルク家の首領がボヘミア

## 音楽現代

2013年11月号 定価 840円

- ♪特集＝リヒャルト・ワーグナー&ジュゼッペ・ヴェルディ ～2人の巨人に至る道、そして…
- ♪特別文化対談＝ヴァレリー・アフアナシエフ＋金剛永謹〈能とクラシック音楽の間で〉
- ♪カラー口絵
  - ・サイトウ・キネン・フェスティバル松本 2013
  - ・ミラノ・スカラ座来日公演「ファルスタッフ」、  
「リゴレット」
  - ・ザルツブルグ音楽祭
  - ・ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団  
エデュケーション・プログラム
- ♪インタビュー＝飯守泰次郎、前橋汀子  
山口恭範＋吉原すみれ、イレーネ・テオリン  
山本純ノ介、中澤創太、福田祥子  
大島尚志 及川睦子 他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11  
TOMYビル 3F  
芸術現代社 TEL3861-2159

王を兼任するという形で、実質的にはハプスブルク家の支配下に置かれることとなる。そうした状況の中、ハプスブルク家の支配に対する抵抗が幾度となく起こり、ヨーロッパ各地でナショナリズムの覚醒が見られるようになった19世紀になると、それはいっそう激化していった。音楽の世界においては、ベドルジハ・スメタナ(1824 - 84)に見られる「国民楽派」が音楽を通じてチェコ人による民族自決を促したエピソードはあまりにも有名だが、それも見方によってはあくまでボヘミアが圧倒的な主導を握ってチェコの独立運動をおこなったのだ、とも読めるわけである。

たしかにそのように考えると、少なくとも19世紀の「チェコの音楽」を代表する作曲家といえば、真っ先に頭に浮かぶのがスメタナやアントニン・ドヴォルザーク(1841 - 1904)、ズデニェク・フィービヒ(1850 - 1900)といった、いわゆる「ボヘミア楽派」の面々なのである。現在チェコの首都はプラハだが、それとても元はボヘミアの都だったことを考えると、「チェコ」と呼ばれているものの中心的存在はあくまでボヘミアだった、といっても過言ではないだろう。

### 音楽的不毛と人材流出の地

というわけで、本稿では「ボヘミア」の音楽にフォーカスを当ててもう少し論じてゆきたいのだが、上で述べた19世紀における「ボヘミア楽派」の出現まで、この地の音楽は不毛の時代にあったかのように言われることがままある。

簡単に述べると、まずは30年戦争が大きな原因だった。これは1618年に勃発した戦争で、当初はカトリックを奉じるハプスブルク家とその帝国対、フス派(ボヘミアの宗教思想家ヤン・フス(1369 - 1415)に由来する、カトリックとは異なる路線のキリスト教の一教派であり、ルター派をはじめとする宗教改革運動の先駆けであると同時に、宗教面からボヘミアのアイデンティティを形成する派であった)をはじめ反カトリックを唱えるプロテスタントに傾倒したボヘミアの貴族、という宗教対立の様相を呈していた。

ところがハプスブルク家の弱体化を目論むヨーロッパの他の諸国が戦争に続々と参加した結果戦況は泥沼化し、1648年に和議が結ばれるまで各地で紛争が繰り広げられることとなる。特に主な戦場となったボヘミアの荒廃はすさまじく、とても音楽活動を積極的に展開できるような状況ではなくなってしまった。さらに30年戦争終結後、ハプスブルク家はボヘミアにおいてプロテスタントを弾圧し、カトリックを復興させる政策に出たため、多くのボヘミアの音楽家が国外に流出する事態が起きる。当時の音楽家は、社会的・経済的な安定を得るにあたっては貴族の屋敷や教会で働くのが王道だったが、ボヘミアで支持されていたプロテスタントが弾圧され

るとなると、何よりも彼らの働く場がなくなり、くわえて身そのものにも危険が迫ることとなったためだ。

というわけで、「ボヘミア出身」でありながら、「環境のより整った他の場所」で働いた音楽家は少なくない。ヤン・ディスマス・ゼレンカ（1679 - 1735）はドレスデン、フランツ・ベンダ（1709 - 86）はベルリン、ヤン・ヴァーツラフ・シュターミッツ（1717 - 57）や彼の息子たちのカール・シュターミッツ（1745 - 1801）とアントン・シュターミッツ（1754 - ?）はマンハイムといった具合に、バロックから古典派にかけてのボヘミア出身の音楽家にはこういったケースがしばしば見られる。じっさいその後も、ボヘミアに生まれたアントニン・レイハ（1770 - 1836）やヤン・ヴァンハル（1739 - 1813）といった人々がウィーンで活躍するといった具合に、ボヘミア音楽界が蒙った人材流出は測り知れなく映ってしまう。

### ナショナリズム史観の取りこぼすもの

それでも、これは単なる人材流出だったのだろうか。たしかに「ボヘミア」にのみ焦点を当てればそのようになってしまうのかもしれないが、オーストリアを中心に東ヨーロッパのそこかしこやイタリア北部等を支配し、ドイツ地域にも隠然たる影響力を有していたハプスブルク家の巨大な所領＝ハプスブルク帝国全体から見ると、話を単純化することは難しい。何しろハプスブルク帝国の都は、幾つかの時期の例外を除いては長らくウィーンに置かれており、そうした都を目指して帝国内のそこかしこから多くの人が出てきた結果、この街で一生を過ごすことになった例には事欠かないからだ。

だからこそ、例えばレイハもヴァンハルもウィーンへ「上京」し、「ウィーン古典派」の一翼を担った。またそうした状況を見るにつけ、彼らにとっては必ずしもウィーン＝ボヘミアの敵であるハプスブルク家のお膝元、というイメージではなかったということになる。むしろウィーンは、多民族多言語国家であるハプスブルク帝国の縮図そのままに、典型的な多民族多言語の国際都市に他ならなかった。

そうでなくても、19世紀に入りナショナリズムが高まる以前は、「国」という概念そのものが現在のように明確なものではなかった。例えば冒頭に掲げたザルツブルクの場合、この街の生んだ超有名人ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756 - 91）などは、幼い頃の豊富な海外経験も加わって、よもや自分が「ザルツブルク大司教領人」であるとか、ましてや「オーストリア人」であるなどとはつゆ考えていなかったろう。しいて言うならば彼は「ヨーロッパ人」であって、自らの出身地の属する国がその人のアイデンティティを決定してしまう状況とは異なる時代に生きていた。

そう考えてみると、ザルツブルク近郊で生まれた『きよしこの夜』が、ボヘミアでかなり早い時期に受容されたというエピソードも充分理解できる。実は18世紀後半、ボヘミアではカトリック教会で歌われるにもかかわらず（既にこの頃になると、元々プロテスタントの活発だったボヘミアにおいても、カトリック化がほぼ浸透している状況だった）、カトリックの典礼文にほとんど捉われず、むしろ地域性を押し出した歌詞やメロディを重視した「田園ミサ曲」が愛されるようになっていた。特に現在でもこのジャンルで有名なのが、ヤクブ・ヤン・リバ（1765 - 1815）作曲の『チェコの降誕祭ミサ曲』である。



ヤクブ・ヤン・リバ

こうした状況の中、「オーストリア」の一部となったばかりにすぎないザルツブルクから伝えられた『きよしこの夜』が、ボヘミアの地に根を下ろした、というエピソードをどう捉えればよいのだろうか。つまりは19世紀半ば以降の「ボヘミア楽派」誕生以降のように、ハプスブルク帝国内の音楽をナショナリズム的な側面からのみ捉えてしまうことの偏り…さらにいえば無意味さが浮かび上がってはこないだろうか。何しろ『きよしこの夜』の例一つをとっただけでも、現実はより多層的で複雑な様相を呈しているのだから。

（こみや まさやす：ヨーロッパ文化史研究家）

〔主要参考文献〕

*Oesterreichisches Musiklexikon* 1 (2002)

V.Helfert/ E.Steinhard, *Die Musik in der Tschechoslowakischen Repbluik* 1938

Fr.Zaggiba, *Musikgeschichte Mitteleuropas* 1976

### 小宮正安（こみや・まさやす）プロフィール

ヨーロッパ文化史・ドイツ文学研究家。著書に『オーケストラの文明史 ヨーロッパ3000年の夢』（春秋社）、『モーツァルトを「造った」男 ケッヘルと同時代のウィーン』（講談社現代新書）、『愉悦の蒐集 ヴンダーカンマーの謎』（集英社新書）など多数。脚本家としては2006年に初演された『狂言風オペラ〈フィガロの結婚〉』を手がけ、同プロジェクトの〈魔笛〉は2010年ドイツ各地で上演され高評を博した（10月には日本公演も予定）。横浜国立大学教育人間科学部准教授として、後進の指導にも当たっている。

なお、2010年5月、2011年6月に本会主催で開催された、文化シンポジウム『西洋近代史と音楽家たち』で、メインパネラーを担当する。



## 諸井誠さんの死を惜しむ

作曲：助川 敏弥

諸井誠さんが亡くなった。9月3日。

諸井さんは、年齢では私と同年で五ヶ月若い。しかし、現、東京芸大の前身の東京音楽学校は入学が早いので学校では私の方が後輩になった。卒業後もよく学校に来られたし、教室も同じ池内友次郎先生の門下であった。私たちはよく歓談したものである。

父上は高名な作曲家諸井三郎先生、途中まで父上の指導を受けたが、他人の教育が必要ということで池内先生に師事されたとのことだった。諸井さんが一躍世界的に注目を受けたのは、戦後間もなくの作品、「無伴奏フルートのためのパルティータ」であった。この曲は国際的な賞を受けた。12音音列で出来た日本最初の曲だが、その卓抜な着想が世界の賛嘆を受けた。12音の音楽は音の水平の配列では問題ないが、タテ、つまり和音の構成となるととたんに難しくなる。諸井さんは、無伴奏ということで、この宿命的困難を見事に回避した。アイデアの勝利である。戦後まもなくのことで、日本の作曲界、日本のいや音楽界全体が世界への遅れに沈んでいた時である。諸井さんは秀才であったが、頭がいい人にありがちな、平面的な計算力だけでなく飛躍した着想力でも非凡な人であったことがこの作品にあらわれた。

多くのすぐれた作品を送り出し、日本の作曲界を主導したが西洋音楽の研究にはすでに奥義を尽くしたのであろう。中年以降は日本の伝統音楽に関心を向け、尺八曲、合唱曲、そして、劇場作品、シアターピースに関心を向けた。つい先ごろ日本合唱協会が追悼再演した寺山修司の詩による「花札伝綺」は会場を巻き込んだ異色の衝撃をあたえた。この作品が1972年初演された時、私の和太鼓と合唱の曲も初演された。他人の作品が感心できないときはきびしい人だったが、評価した時は実に率直に賛辞をくれた。名門の生まれであり、育ちのよさが言動と挙動に自然に現われていた。さいたま芸術劇場の館長もつとめ、出版社の顧問もつとめた、社会的に卓越した人を失った。尊敬と哀悼をささげる。

(すけがわ としや:本会代表理事)

忍耐・継続・努力  
～師ミケランジェリから学んだこと～

## ミケランジェリの内弟子に

昭和40年（1965年）、ミケランジェリ<sup>1</sup>が初来日しました。その年、私は30歳になっていました。東京芸術大学を卒業してから、2年の専攻科を修了し、上野学園大学で教えていました。留学してイタリアの先生に習いたい、という希望を持っていましたので、小野桃代先生にイタリア語を学び始めました。小野先生のご紹介で、ミケランジェリが来日したとき、私は日本都市センターホールで、すぐ近くのホテルに宿泊していた彼に演奏を聴いていただける、というチャンスに恵まれました。日本人がどんな演奏をするのか聴きたいというお気持ちもあったのでしょう。他にも桐朋の子どものための音楽教室の生徒さんの演奏なども聴かれていました。私は、



筆者の師ミケランジェリ（1920-1995）

ショパンやベートーヴェンなど、1時間ほどのプログラムを聴いていただきました。

ミケランジェリの聴き方は面白かったです。私の演奏中、ホールの中を動き回りながら聴くのです。ホールのいろいろな場所で音を聴いていました。でも、テクニク的な難所になると、ずっと舞台に近づいてきて、指をしっかりと見ていました。

ミケランジェリは、日頃から「教室で弾いたものよりサイタルで弾くものは同じではない」「ホールで弾くものは、そのホールで練習しなくては」と言っていました。教室でどんなに上手く弾けていても、ホールで聴いたらあまりよくなかった、ということもありますし、ホールでとてもよい演奏だったのに、近くで聴くと意外とテクニクが荒かった、などということもあります。ミケランジェリは、そういった違いを

<sup>1</sup> イタリアのピアニスト、ミケランジェリ（1920-1995）の正式な名前は、アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリ（Arturo Benedetti Michelangeli）

敏感に聴き取っていました。私の演奏もホールでどう響くのか、聴いていたのでしよう。

私の演奏を聴き終わると、シエナの夏期音楽アカデミーで自分のレッスンを受けるにこないか、と誘われました。音楽アカデミーを受けるには試験をパスしなければならなかったのですが、ホールでの演奏で、それは免除され、合格ということになりました。

そして、2週間の夏期音楽アカデミーを経て、内弟子になることになったのです。

#### 4年間の留学生活

ミケランジェリはアレツォ（Arezzo トスカーナ州）に自分の内弟子用の家を1軒借りていました。内弟子に1部屋ずつ与え、そこに住まわせていたのです。私が入ったときは、9年も師事しているという女性とイタリア人の男性、そして中国人の3人の弟子が住んでいました。私はイタリア人の男性のピアノを借りて練習しました。のちに高野耀子さんと佐々木素さんが見えました。そして、私が帰国した後は浅野繁さんがスイスで彼に師事しています。

アレツォの家では、各生徒の部屋のピアノに互いに邪魔にならないように弱音器が付けてあるのですが、他のお弟子さんの練習する音は漏れて聞こえてきました。そういうのを聞くのも勉強になりました。また、先生は当時まだ45歳でいらして大変お忙しく、なかなかお帰りにならなかったのですが、お帰りになられると先生の練習する音が聞こえてきて、耳をそばだてたものです。部分練習や細かい練習など丁寧になさっていたのを覚えています。通し練習というのはなかったです。通し練習は自宅などではなく、本番前になると調律師のタローネ楽器店で行っていたようです。そして直前は、コンサート会場にご自分のピアノを運び入れ、1週間くらいかけて調整していました。でもリハーサルも含め、先生の練習は非公開でしたから、通し練習は聞いたことがありません。

私ははじめ2年間留学した後、一度帰国し、1年おいてまた2年間留学しました。計4年間です。

#### ミケランジェリ先生の教え～忍耐・継続・努力～

先生のレッスンは、短い言葉で的確におっしゃいました。例えば「ここはフォルテだよ」と。そういう言葉に、ただ「ああそうなのか」とそこをフォルテにするのではいけません。その一言から「なぜ、そこがフォルテなのか」を考え、その理由に気が付いたらそれをすべてに応用する。つまり、「一を教えて10倍にも30倍にもする」という教え方でした。他にも例えば「レガートは感覚の問題だよ」とおっしゃったのですが、その言葉から、レガートは音の響きによってつなげるものだ、音を十分響かせないとつながらない、ということを理解しなければならないのです。本人の力が必要でした。

また、それぞれの作曲家に合った奏法をマスターする、つまり作曲家によって奏法を変えるとということも大事にされていました。たまたま1度レッスンを受けた課題を1年レッスンが受けられない、ということがありましたが、「1年もレッスンを受けていないのでどう勉強して良いかわからない。」と言うと、「たった1年！人間が赤ちゃんから大人になるまで何年かかると思っているのかい？」「あなたのファンタジーとアイディアとイメージがないからだ。」と言われました。それがあれば、どうやって勉強すればよいのかがわかるし、自分で工夫できる。与えられるのではなくて自分で会得しなくてはならない、ということがわかりました。そしてそれまでの自分が、目先のことしか考えていなかったことに気が付いたのです。

私はミケランジェリから、忍耐力と継続すること、そして努力というものを学んだと思います。それまで与えられることに慣れ過ぎていたのです。レッスンが数少ないことにより、そういうことに気が付きました。何かをヒントにして自分で考えたものは忘れません。

飽きずに時間をかけると、人それぞれ、自分の身に合った自分らしさを見つけられるのです。自分で見出すことができますと、苦勞が喜びになります。

また、基本が大事とも言われました。それから自分自身を客観的に見なくてはいけない、そして冷静な耳を持つように、と。自分の演奏



ピアノに向かう筆者(2006年)

を聴き分けるよい耳です。よく「あなたのピアノは息をしていない」と言われましたが、耳が第三者的になって、相手に自分の音が伝わっているかどうか聞かなくてはいけないのです。そして「一生の間に燃やす量は同じ」ともおっしゃいました。「太く短く燃やすか、細く長く燃やすかだ」とおっしゃいました。

ミケランジェリは、秘訣は教えませんでした。盗めるものは盗んでいい、と言いました。音楽についてお話ししてくれたこともありますし、こちらの質問にも皆答えてくれました。

弾きなれた曲であっても、新しく見直す先生でした。「自分は去年と同じ演奏はしていない。年々変わるのだ」、と同じ曲でも弾き直すたびに、いろいろな観点から新しい発見をなさいました。ミケランジェリの演奏が時期によって違うのはそういう理由があるからです。

ミケランジェリの演奏は、CDとしては残っているものは少ないのですが、自分の満足したものしか残したくなかった、という謙虚な気持ちもあり、録音が少ないのです。目に見えないところで努力なさる先生でした。

「弟子のためにはいい教育者がたくさんいるほどよい。いい教育者を育てるのだ」とおっしゃっていました。演奏家としても教えていただきましたし、教育者としても教えていただきました。

## キャンセルの理由

ミケランジェリは、すべての感性が鋭い人でした。体も弱かったようです。薬に詳しい人でしたので、私たちが具合悪くなったときにも合う薬を勧めて下さったりしました。

また、指先の感覚がデリケートで、関節すべて、体がすべて柔軟に対応していたように思います。脱力がうまかったです。

よくリサイタルをキャンセルした時もありました。「弘法筆を選ばず」ではありませんが、本来は、どんな楽器を与えられても弾かなければならないのです。でも、ミケランジェリは、「1台のピアノはすべての基本になる」というお考えでした。いかにピアノの特性を駆使してその可能性を極めるか。先生の鋭敏な感覚で、すべてをコントロールして、表現したいものを突き止めるのです。楽器が整っていないと、自分の演奏の魅力が失われるから演奏はできない、ということでした。「F1レーサーが完璧に整備されていないものに乗れますか？」とよくおっしゃいました。

ミケランジェリはハンブルグ・スタンウェイを使用していました。リサイタルの前に、ハンブルグの工場で気に入ったものを選び、それを持ってくるのです。最後の来日のときには気に入ったピアノがなかったようです。ミケランジェリのリサイタルでは、「ピアノの内部になにか工作しているのではないか」と疑われたこともありましたが、それは調律師さんも証言していますが、そんなことはありませんでした。ミケランジェリは楽器の構造にとっても詳しく、よいピアノを選んでいたので、そう聞こえたのです。

キャンセルの度に多額な金額を抱えるわけですから、詳しくは知りませんが、大変だったと思います。

## 生の息づかいを大切に～今だから、感じること～

以前は洗足学園音楽大学で（注：現在は退官して名誉教授）、今は日本大学芸術学部（大学院芸術学研究科）で長く教えていますが、人を教えることは難しい、と思います。責任があって怖いと思います。同じことでも10人それぞれ受け止め方が違います。本人の特性を伸ばしながら、不得意なことを教えなくてはなりません。日々、生徒を教えることで私も勉強しています。

今の方たちは、録音機器によって完璧な演奏が聴けるようになり、耳が発達しています。機械化された音に対して非常に敏感な人もいます。しかし、生の演奏に対する感性も大切です。生の演奏は、二度と同じ演奏ができません。その時、演奏者がすべてをかけて自分のメッセージを伝えている。その緊張感と偶然性、生の息づかい、説得力、聴衆と共有している空間を大切にしてほしいのです。人間の心の底から発している感動を味わってもらいたいです。心臓の鼓動や体を流れている血、そういったすべてを含めた人間のあたたかさは大事です。

今、若い人たちを商業ベースに乗せて使い捨てにしているのがとても惜しいと思います。フルに使いすぎると思います。どうやって実を結んでいくか長いスパンで考えていって育てていってほしいです。若い人も、「早く売り出したい、早く有名になりたい」と焦っています。一朝一夕ではできないのです。

ピアノを勉強する人は、ピアノ以外のジャンル、オーケストラとかオペラにも良く触れてほしいです。アンサンブルもそうですね。ピアノは打楽器ですから、歌とか呼吸といった打楽器ではできないことを、他のジャンルの音楽を学ぶことによって、それをピアノで活かしてほしいです。それから人との交流も大切です。他のジャンルの人と触れ合うという意味で、音舞会（日本音楽舞踊会議）はとても貴重な存在だと思っています。横のつながりはとても大事です。

若いうちはわからなくても構わないのです。わからないまま続けることは難しいです。情熱で続けていかなければなりません。自分なりにわかるまで、どんな道でもいいから音楽を捨てないでほしいです。

### **音楽には希望がある～音楽を通じた社会貢献～**

今の人には有望だと思っています。こういう時代だからこそ、失ってはならないと思います。音楽には希望があります。お金以外に、なくてはならないものがあります。

音楽は裏切りません。誠実に対応すると、その人を裏切りません。でも、自分が裏切ると自分に戻ってきます。音楽は、自分の心を映す鏡なのです。ミケランジェリが「苦しいときも悲しいときもピアノ、楽しいときもピアノ」と言っていたのが、まさにその通りです。音楽が素晴らしいと思う、そういう光を灯し続けなければなりません。

最近、日本人が日本人の作品を弾くことが増えてきてとてもよいと思っています。これからは是非、外国でも弾いてほしいです。そして盛んになってほしいです。

ミケランジェリは、私たち留学生からレッスン代を受け取りませんでした。レッスン代どころか、食事までお世話になりました。ボランティアで教えてくださったのです。今まで自分が得たものを、社会へのお返しとして、次世代へ伝える、とい

う社会貢献でした。私も、自分にできることをほんの少しでもいいから、音楽を通して社会貢献していくことは大切だと思っています。



教え子たちに囲まれて（前列左から3人目が筆者）、前列左は広瀬美紀子氏

今回の連載文はご本人のお話をもとに構成しました。インタビュアーとして、広瀬美紀子（会員・ピアノ）さんにもご協力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます

（取材日 2013年9月20日 新宿にて 文責：湯浅 玲子）

### 【村上明美（むらかみ あけみ）プロフィール】

ピアノを井口秋子、ハンス・カン、ジョン・ハント、マックス・エッガー、アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリの各氏に師事。

第6回全日本学生音楽コンクール全国大会に優勝し、第23回音楽コンクールに入選する。東京藝術大学在学中、安宅賞を受ける。東京藝術大学卒業後、東京藝術大学専攻科に進み、専攻科修了後、第1回リサイタルを開き、好評を博す。

その後、1965年～1967年、1968年～1970年、イタリアで世界的ピアノの巨匠アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリ師の許で研鑽を重ねる。

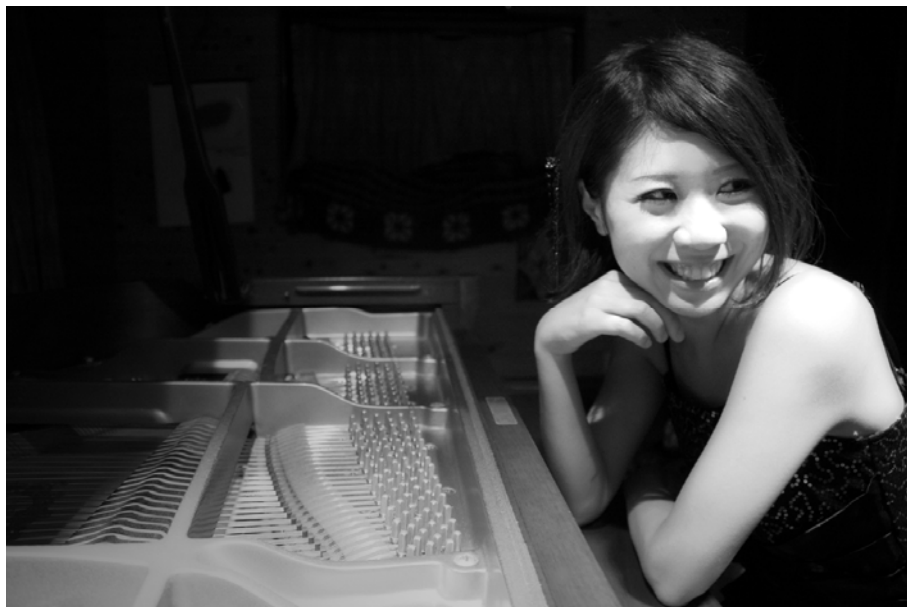
1966年キジアナ音楽アカデミーのマスターコースを最優秀賞で卒業。帰国後は、リサイタルをはじめ交響楽団と協奏曲を共演するなど活躍する傍ら、レコーディングや各地の公開講座、公開レッスンの指導にも活躍している。

現在、洗足学園音楽大学名誉教授、日本大学大学院芸術学研究科講師、公益財団法人日本ピアノ教育連盟会長、副理事長を務める。日本音楽舞踊会議ピアノ会員

## 自分自身と向き合う

ピアノ 北村 真紀子

青年会員のピアノ科  
北村真紀子です。この  
様な場にご書かせて頂き  
恐縮です。語れるよう  
な事はあまりありません  
が、近況報告をさせて  
頂きたいと思えます。  
指を脳神経の病気で壊  
してから、今年で4年  
になりました。現在も  
治療を続けながらピ  
アノを弾いておりますが、



思い返せば様々な体験をしたと思えます。右手の人差し指が曲がったまま動かなくなり、単純なスケールが弾けなくなった事から始まった病気と向き合い始めたのは春でした。ちょうど大学院での勉強が始まったばかりでひどく困惑しましたが、先生方や仲間に恵まれ、とても充実した最後の学生生活を送る事ができました。その時に学ばせて頂いた左手の為の協奏曲、ソロ曲、室内楽曲は、今でも私の宝物です。今は大分快復はしてきましたが、やはり日によってまったく弾けない時もあります。そんなストレスとは反比例に、今までの恵まれた環境にいかにか自分が当たり前のように甘えていたか、また今更ながら、自分の指で出す音への責任の重大さを痛い程知る事ができました。この様々な経験も、今は全てを受け止めきれてはいないかもしれませんが、私の宝物になると思えます。

失ったものもありました。ピアノ弾きにとって当たり前の事が出来なくなった自分に焦り、ムキになってピアノを弾き、信頼をなくした事もありました。恥ずかしい話ですが、街中で流れる音楽やコンサートでのピアノの音を聴けなくなる事もありました。でも、この失った様々な事柄もいつかきっと取り戻せる日がくると私は信じています。今出来ない事があっても、今しか出来ない事、やらなくては行けない事が山の様にあると気づいたのも、やっと最近になってからの様な気がします。これからも先生方、また会員の皆様のお力をお借りしながら、毎日を過ごさせて頂いたら…と思っております。

（きたむら まきこ：ピアノ部会 青年会員）



## 私の現在の音楽活動について

ピアノ 大矢 絢子

日本音楽舞踊会議に入会させていただいてから、早いもので7年が経ちました。初めて「音楽の世界」に投稿させていただきましたが、私の現在の音楽活動について書かせていただきたいと思っています。

私は母校の桐朋学園大学で嘱託演奏員として勤務しています。声楽の授業の担当で、オペラクラス、合唱、ディクシヨンの授業の他、実技試験や特別レッスンの伴奏をしています。その中でもオペラクラスの授業では、ハイライトではありませんが様々な作品を伴奏させていただき、分析や解釈等とても勉強になっています。伴奏をする時にはヴォーカルスコア(オーケストラをピアノ用に編曲した楽譜)を使用しますが、出版社によってピアノパートの編曲が全く違いますし、楽譜通りに弾けばオーケストラ同様に多彩で壮大な音色



が出せるわけではないので、自分でオーケストラスコアを読んでヴォーカルスコアの伴奏譜に必要な音を足したり、削る作業が不可欠となります。また、声楽の伴奏をする際には歌詞の意味を全て把握する必要がありますが、扱う言語はイタリア語・ドイツ語・フランス語・日本語・英語・スペイン語と様々なので、いつも辞書を持ち歩いています。各言語によって子音の扱い方が違うため、拍の感じ方や音を入れるタイミングが違い、とても興味深く勉強になります。指揮のタクトに合わせて、一緒に呼吸をしながら音楽の流れを作り且つ支えていくことは、自分自身の音楽表現にもとても役立っていると思います。

その他学外では、定期的に演奏の機会をいただいています。大学時代の同じ門下の同級生4人で結成したピアノアンサンブルユニット「KARTY(カーティー)」もその一つです。毎回、ソロ・連弾・2台ピアノ・2台8手と、4人でできる様々な組み合わせの演奏を行っています。昨年6回目のコンサートを行いました。来年夏にもコンサートを開かせていただく予定です。その他、同じ小学校出身のクラリネット・チェロの同級生とのアンサンブル「Duo feuilles(デュオ・フュユ)」 「Trio Foglie(トリオ・フォリエ)」の演奏活動を行っています。

他方、大学院時代の修士論文に譜例を入れることが契機で興味を持ち、パソコンでの楽譜浄書ソフト「Finale」の出版向け浄書の勉強を続けています。Finaleは高機能なソフトで、符尾の長さや連桁の傾き、楽譜フォントの大きさ、楽譜のレイアウトなど、少し手を加えるだけで楽譜を綺麗に見せる仕掛けがたくさんあり、いつ

も「目から鱗」の連続です。作業はとても細かい箇所にもまで及んでいて緻密さと根気が必要ですが、楽譜の作り手の気持ちが分かると、演奏する時により丁寧に楽譜を読みたくなります。演奏する上で読みにくい楽譜も時々目にしますが、見るだけでも音楽が聴こえてきそうな美しい楽譜を作れるようになりたいと思います。

こうした中でも、私にとって最も欠かせないのはソロのレパートリーの開拓と研鑽です。楽譜から作曲家の意図を読み取り、自分の内面とじっくり向き合い、一つの音を出すときにどのような音を出すべきなのか、思いを込めて音を創り上げていく作業が好きです。年末に初めてのリサイタルを開かせていただきますが、今どうしても勉強したい新しいレパートリーに取り組んでいます。心を込めて演奏させていただきたいと思っています。

今後も微力ながら音舞会の活動に貢献させていただきながら、自身の演奏活動に邁進していきたいと思っています。

(おおや あやこ：ピアノ部会 青年会員)

☆☆★☆☆

### 若い会員は語る（その3） - 3

## シャンソンとの出会いと現在の活動

ピアノ 神田 麻衣

ピアノ部会青年会員の神田麻衣と申します。大学時代からお世話になっております中島先生より執筆のお話を頂きまして、拙い文章ですが私の活動について書かせて頂きました。

私は現在、音楽教室と自宅教室でピアノを教えながら演奏活動をしています。クラシック、ポップス、シャンソン、ブルース・・・等々、依頼されたお仕事はたいして何でも受けています。

大学の頃はクラシックしか勉強していなかったもので、もちろん最初はクラシックでの演奏ばかりでした。

室内楽や楽器・声楽の伴奏が主で、演奏場所も基本的には環境の整ったホールが中心。今後もこういう活動を続けていけたら良いなと思っていましたが現実はなかなか思うように行かず・・・それでも常にアンテナを張ることを欠かしませんでした。そんな時、現在伴奏させて頂いているシャンソン歌手と出会い、生まれて初めて『シャンソン』というジャンルに足を踏み入れたのです。

シャンソンのシの字も知らず、軽い気持ちで受けた仕事。しかし蓋を開けてみるとそれはかなり大変なものでした。コードをほぼ勉強した事のない私にとって、歌い手から頂く楽譜はただの暗号にしか見えず・・・とにかくがむしゃらにコードを解読していくところから始まりました。と言っても、やっぱりそう簡単にはコードに慣れず、しばらくは作曲の先生にお願いして伴奏譜を作って頂いたり、音源を丸々

譜面に起こしたりして弾いていました。一時期はイヤホンで聴き過ぎて耳の痛みがしばらく治らなかつたくらい・・・(笑)。シャンソンピアニストというのは大抵ジャズピアニストなので、たまに他のシャンソンライブを聴きに行くと、自分の演奏との差に愕然とします。現在はやっとほんの少しコード弾きに慣れてきましたが、なかなかスムーズにはいかず苦戦しています。そしてなんとと言ってもいまだに馴染まないのが、ライブ会場のキーボード。ずっとアコースティックピアノで練習してきた私にとっては違和感そのもので、思い通りにいかない演奏が多々ありました。最近ではアップライトやグランドピアノのあるライブ会場での演奏も増えてきたので



ポップスのライブでキーボードを弾く筆者（右）

で実は少しほっとしています・・・。

そうこうしているうちに、ポップスのライブでのキーボードサポートを依頼されるようになりまし。クラシック感漂う私のキーボード演奏はきっと違和感有るだろうなあ、共演者の反応を伺いながらの演奏ですが。元々ポップスはあまり聴く方ではないので特にリズムで

悩みます・・・。

そのような事で演奏の幅はぐっと広がり、小さなライブハウスからオシャレでレトロなジャズバー、時には野外ステージ、投げ銭ライブ等本当に様々な場所で演奏させて頂き、当初希望していた活動とはかけ離れた現実ではありますが、むしろこの方が刺激があり毎回楽しんでいきます。11月には焼酎の蔵元での演奏もさせて頂く予定で、お酒好きな私にとってはかなりの楽しみなイベントです(笑)

もちろんクラシックでの演奏も積極的に参加しています。今年5月に初めてソロリサイタルを開催させて頂きました。自分の世界観をあますところなく表現したいという強い思いから、少し風変わりなプログラムになってしまいましたが、いらして下さった方々には「思い」が伝わったと仰って頂けて嬉しく思いました。今後も先生方やお客様からご意見を頂いたりして、まだまだ色んな事に挑戦して研鑽を積んでいかなければと思っています。

話は変わりますが、現在趣味でウクレレを弾いています。弾いていると言ってもまだ人前で披露できるほどではなく、独学で教本とにらめっこ中ですが・・・。いつかハワイでウクレレを弾きたい！というささやかな夢もありますので、ピアノと共にこちら頑張ります。

(かんだ まい：ピアノ部会 青年会員)

## 浮かない秋の気分

消費税増税実施のゴーサインが出た。直後の新聞世論調査では、増税賛成が過半数をこえた。同時に内閣支持率まで上昇。本当?!。私のまわりでは増税反対が多数であった。景気は悪い、収入も上がらない、が実感。耳に入ってくるのは、マイナス要因ばかりである。

社会保障充実のための安定財源としてのはずが、いつしかその枷(かせ)がはずされ、公共事業や景気対策にまで使われるという方向になっている。それでもいいのか。1ヶ月前のそれでは、反対が多数であったはずだ。この間劇的に何か状況の変化があったというのだろうか。にわかには信じがたい。



「大新聞の消費税世論調査は、世論操作だ」— 反対を賛成に変えるカラクリを暴く — (週刊ポスト 10月25日号)。

そうか、やっぱり……。週刊誌の見出し広告を新聞で見た。しかし今さら暴いてもらっても、事がひっくり返るわけではないし。だまされたと怒って、新聞の不買運動をおこしたところで、大新聞すべてが相手じゃ始まらないということで、その記事はまだ読んでいない。

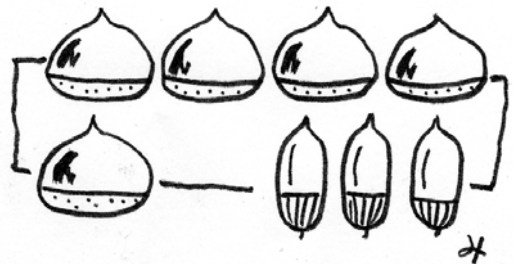
何年前だったか、消費税3%が実施されたのは。良いきっかけとばかりに3%ダイエットを試みた。3%食事制限というもの。甲斐あってニンマリのそれもつかの間、見事リバウンド。さて5%、今度こそ。ささやかな抗議を身をもって、

などと決意して。が、これまた失敗。糖尿病予備軍のおまけまでついてきて。

さすがに今回の8%。三度目の正直、と思わぬこともないではないが、残余の人生を量りにかけ、ムダな抵抗はやめることにした。

話はさらにさかのぼり、42年前の松本でのリサイタルだ。入場料800円。チケットを税務署に持参。販売枚数分の税金を支払い、領収印を押してもらおう。そのころ、800円でも税金がかかった。

やがて景気が上向き、国民総中流とかの流れの中で、入場料2000円が、このあたりの平均になった。そして、税金もかからないことに。だからといってコンサートの運営が楽になったわけではない。経費も同様に上昇してるのだから。



それから30年余、私が主催するコンサートは料金をすえおきで今にいたる。その間、消費税3%、5%と経費が上り、もはや長屋の大家の道楽状態だ。8%では、もう無理か……。

玉子は物価の優等生! などと言われて久しい。玉子ほどではないが、「あなたのコンサートは安いから行きやすい」と、長年おつきあいいただいていたご婦人から、電話があった。「今度のコンサート、お金がなくて行かない」という。ご招待しますと応じてダメだという。聞けば会場までの交通費が往復5000円(タクシー料金)かかるのだ。75歳、

女一人の年金暮らし。よくぞ、今まで……。一年に一度の楽しみだったと。なんともありがたくも、せつない話。

イタリアは、今不況にあえいでいるらしい。「イタリアの悲劇」― 塩野七生（しおのななみ）文芸春秋 2011年11月号―。失業者、短期の非正規労働者、未就業者が増えて、消費が冷え込んでいる。「財政の健全化を最重要視したがゆえの増税と、それを厳密に実施するうえでの税務の警察化」が、消費の冷えこみに拍車をかけ、余裕のない社会になってきているようだ。それが犯罪を呼ぶことにも。



「かつてイタリアの殺人は恋愛沙汰で起っていたのが、貧しさと将来への不安と自分も含めた人間全般への怒りで起るようになってしまった。」と塩野さんはレポートする。

ちなみにイタリアの消費税は21%。この10月、改定されて22%に。1%の増税が政策にどう生かされるのか、知る由もないが、結果として、消費は更に冷えこむことになるのだろう。

「消費が減れば失業者が増え、その失業者救済のために税金を上げ、それでまた消費が冷えこむという悪循環。政府は、従業員を新規に採用した企業には、補助金を与えると決めたが、製品が売れない

のに従業員を増やす企業があろうか」とも塩野さんは指摘する。

ヴェルディ生誕200年。“ヴェルディ三昧”の好景気に、国をあげてのお祭りムードかと思っていたが、そうでもなさそうだ。

さて、先ほどの世論調査のことだが、アンケートというのは、質問の仕方でも回答が変わる。消費税に賛成か反対か？ではなく、ギリシャのようにならぬようとか、社会保障に特化してなどの条件をつけたら、どうだろう。賛成する人は増えるに違いない。3%の増税で国家破綻をまぬがれ、社会保障が充実するのなら、と。

だとしたら、これは誘導型世論操作的調査ということになる。そうだったのだろうか？残念ながらおぼえていない。

増税で景気が腰折れしないよう「法人税減税」「復興特別法人税の廃止」などが打ちだされてきている。つい最近、私は「復興特別所得税」をはらったばかり。ささやかでも、東北とつながっているのが、うれしい。企業（法人）とて同じ思いのはずだ。それとも東北はもう復興したとでも？

なぜ新聞は問題にしないのだろう。そう言えば、新聞を「軽減税率」の対象に、という要求が出ていた。政府とすでにその方向での約束がなされているのか？だとしたら、先の週刊誌の告発は読むまでもないことだ。

それにしてもなんともわりきれない、浮かぬ秋の気分だ。今秋マツタケは豊作だというのに。

【筆者紹介】狭間 壮（はざま たけし）：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。



【挿絵】武田 光弘（たけだ みつひろ）



## 名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第 43 回〕

子だくさんで知られる人

結婚しない男女が増え、子供をつくら  
ない夫婦が増えていることが社会問題  
化している。長寿による老人の増加で、  
日本全体が高齢化に傾いている今、財政  
事情と活力の点で、やがては国が滅びて  
しまうのではないかと心配されるわけ  
である。なるほど、夫婦 2 人の家庭を維  
持するために必要な筈の子供 2 人が、今  
やそれ以下。女性一人当たりが子供を産  
む数は、1.76 人 (1985 年) から 1.35 人  
(1999 年)、1.26 人 (2005 年) と加速  
的に減少している。このまま進むと、人  
口激減とそれに伴うあれこれの問題が  
急浮上してくるかもしれない。どこに原  
因がありどんな対策があるか、考えてみ  
る必要がありそうである。

ところで、クラシックの作曲家たちに  
これを当てはめると、シューベルト、シ  
ョパン、ブラームスのように独身のまま  
子供をつくらなかった人もいるけれど、  
多くは私たちの社会と同じに、結婚し何  
人かの子供を持った人、結婚しないまま  
子供をつくった人、たくさんの子供をつ  
くった人など、いろいろな人がいる。今  
月はそんな中でもちょっと目立つ「子だ  
くさんの作曲家」について検証してみよ  
う。

まず作曲家本人よりも、彼らの家系の  
中に目立つ人がいないかどうかを調べ  
てみると、例えば―― (1) シューベル  
トの父親フランツ・テオドールは、2 回  
の結婚で 18 人の子供をつくっている。

歌曲王のフランツは、前妻の 12 番目の  
子供であること。 (2) リストの祖父ゲ



歌曲王シューベルトの父  
フランツ・テオドール

オルグ・ア  
ダムは、3  
回の結婚で  
27 人の子  
供をつくっ  
た。しかし  
その息子ア  
ダムは、た  
った一人  
(すなわち、  
私たちのフ  
ランツ) し  
かつくらな

かったこと。 (3) フォスターの父親は、  
一回の結婚で 10 人の子供をつくった。  
「夢みる人」を書いたスティーブン・コ  
リンズは 9 人目の子供であること。 (4)  
ブルックナーの父親も同じく、一回の結  
婚で 10 人の子供をつくった。わがアン  
トンはその長男であること。 (5) スメ  
タナの父親フランティシェークは、3 回  
の結婚で 18 人の子供をつくった。「わ  
が祖国」のベドルジハは 3 度目の妻の子  
で、11 番目であること――などが代表  
的といえようか。

そして作曲家本人では、J.S.バッハの  
20 人を筆頭に、ドヴォルザークの 9 人、  
G.P.テレマンの 8 人、シューマンの 7 人、

メンデルスゾーンの5人、などがまあ、子だくさんの代表といえるだろう。

バッハの20人というのは、2度の結婚によってであり、1702年22才の時に結婚した妻マリア・バルバラとは7人の子供、1721年に再婚した妻アンナ・マグダレーナ（先妻の急死による）とは13人の子供をもうけた合計である。そ



大バッハ（左）と3人の息子たち

のうち、成人したのは10人（男6人、女4人）で、特に男性のうちの4人——長男のウィルヘルム・フリーデマン

（1710～84、ハレのバッハと呼ばれた）、次男のカール・フィリップ・エマヌエル（1714～88、ベルリンのバッハ、およびハンブルクのバッハ、——16番目のヨハン・クリストフ・フリードリヒ（1732～95、ビューツブルクのバッハ）、末子のヨハン・クリスチャン（1735～82、ミラノのバッハ、およびロンドンのバッ

ハ）——は、音楽史に名を残す作曲家に育っている。

一方、ドヴォルザークは1873年37才の時に金細工師の娘アンナ・チェルマーコヴァ（19才）と結婚したが、最初の子供3人を次々と亡くし、成長したのは1878年に生まれ、後に愛弟子ヨセフ・スークと結婚した女の子オティリエ以下6人である。

またシューマンは30才の1840年に、ピアノの師フリードリヒ・ヴィークの娘クララと結婚し、8人の子をもうけたが、4番目の男の子がすぐに亡くなったために、実質的に7人。男の子3人と女の子4人が残されたが、長男にあたるルートヴィヒは精神病（シューマンの家系から来たものらしい）に罹って生きる屍の状態。夫を失ってからクララは、彼らを抱えて大変な苦勞を強いられたのであった。作曲家になった子供はおらず、長女のマリーエ、末子のオイゲーニエがピアノ教師を一時期やった程度である。

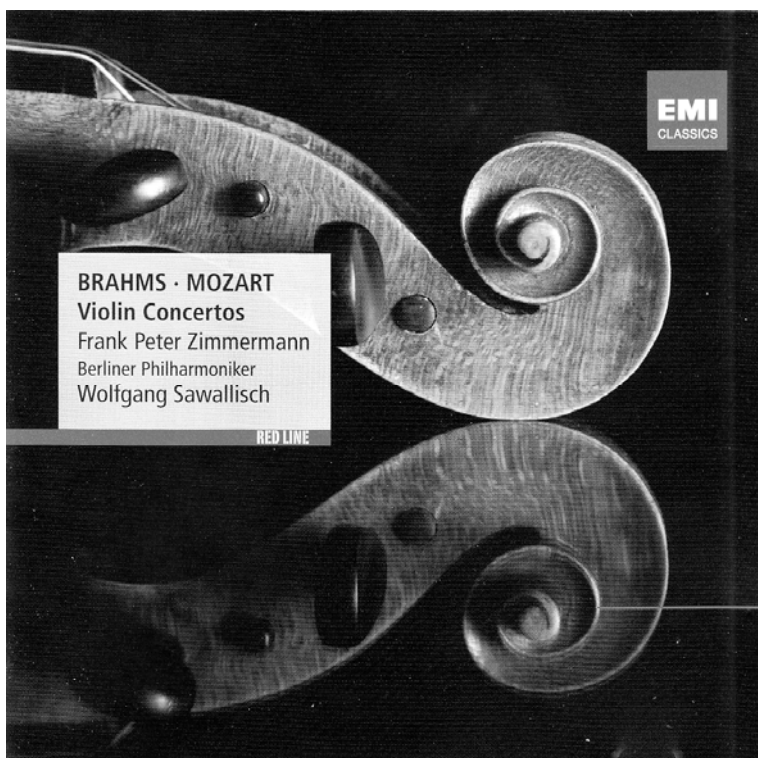
メンデルスゾーンは1837年、28才の時にフランクフルトのプロテスタントの牧師の娘セシル・シャルロット・ジャンルノー（フランス人）と結婚。10年の間に男の子3人と女の子2人の子供をもうけたが、姉の急死からたちまちに氣力を失い、1847年、38才で亡くなってしまった。脳腫瘍だといわれている。

.....  
**【宮本英世氏プロフィール】**1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。



## 2つのブラームス：ヴァイオリン協奏曲

2013年9月26日、NHKホールでツィンマーマン独奏、ブロムシュテット指揮 NHK交響楽団によるブラームスのヴァイオリン協奏曲を聴いた。感動した。ソロは豊かな音とゆとりのある技巧を持ちながら、それを誇示することがない。木管楽器との



感慨に満ちた歌い交わり、弦楽器群の森のざわめきのようなトレモロ、胸の鼓動のような刻み、泉の湧出のようなピチカートとの対話は、まさに至高の楽興の時だった。ブロムシュテットの棒は外面性を排した質実剛健の響きと弾力にみちたリズムをもち、密やかな合奏から雄大な眺望をもつ頂点まで、絶妙に描き出していた。第2楽章など、オーボエはのどかな牧童の笛、ファゴットは寝ぼけた羊の鳴き声、フルートは小鳥のさえずり、ホ

ルンはアルプスの山々にこだまする角笛のように聴こえ、都会の喧騒を離れた、高原の景色や風の優しさが実感された。ああ、ブラームスも自然に安らぎを求める都会人だったのかと感じ入ったのだった。

この実演のブラームスにあまりにも感動したため、新発見の諏訪根自子（1920～2012）独奏、上田仁&東宝交響楽団による同曲CDを聴くのが怖かった。戦後間もない昭和24年のアセテート盤への放送用録音なので音もかなり悪い。しかし、これが素晴らしいのである。上田仁の棒は細部まで目が行き届いた丁寧な仕事ぶりだし、それにも増して諏訪根自子の豊麗な音色、安定した技巧、深くロマンティックでスケール雄大なヴァイオリンが圧巻だ。これまで彼女の録音は、天才少女時代のSP復刻か長い引退後の記念的な録音しかなく、初めて全盛期（29歳）の記録に接し得たのであるが、このような大輪の花が当時の日本に存在したとは新鮮な驚きだった。



第1楽章呈示部でのゆったりとした弾き方など1943年にクナッパーツブッシュ指揮ベルリン・フィルと同曲を協演した経験が生きているようだし、作品の内面に沈潜するような深みは日本人ならではの美の世界と感じられた。

●ブラームス：ヴァイオリン協奏曲二長調（写真：前ページ）

フランク・ペーター・ツィンマーマン（ヴァイオリン）

ヴォルフガング・サヴァリッシュ指揮

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

[EMI 6022972 (CD)] 海外盤

1995年のライブ録音。先の実演に較べ、若きツィンマーマンの音色はずっと甘美でポルタメントも多い。しかし、オケの各楽器との親密な対話は実演と同様である。

●ブラームス：ヴァイオリン協奏曲二長調（写真：右下）

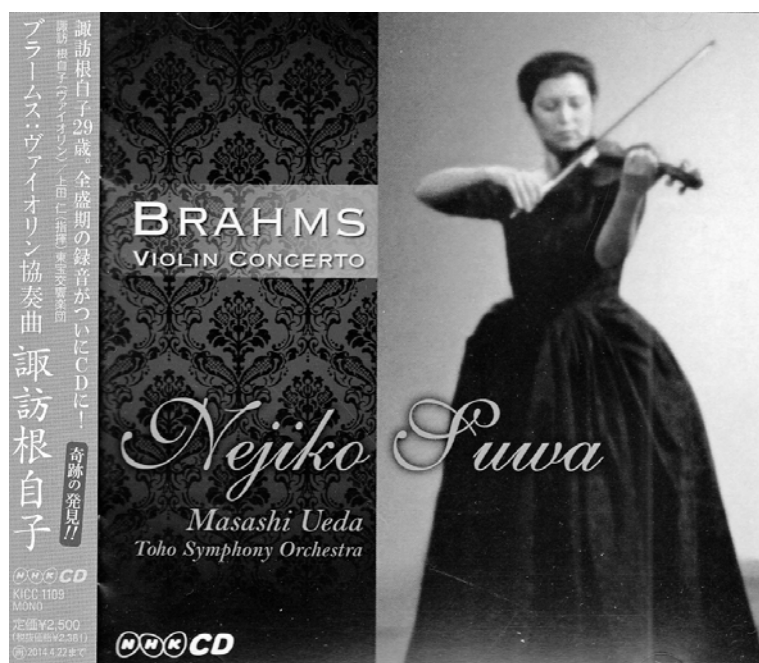
諏訪根自子（ヴァイオリン）

上田仁指揮 東宝交響楽団

[キング KICC1109 (CD)]

1949年録音。諏訪根自子は12歳でデビューした天才少女。

1936年16歳でベルギーへ留学し、その後フランス、ドイツで活躍。1945年に帰国し、1960年頃まで15年間日本のトップ奏者として活躍した。これはその15年間の活躍を今に伝える初めてのディスクである。



.....  
**【板倉重雄氏プロフィール】**1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年HMV ジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」（アルファベータ）を上梓。



## 日本電子キーボード音楽学会と第9回大会

研究：阿方 俊

日本電子キーボード音楽学会は、電子キーボードによる音楽の表現、教育、理論などの研究、および隣接諸科学に関連する学際的な研究協議を行い、音楽文化の発展に寄与することを目的とする他に類をみない団体である。ここで言う電子キーボードとは、電子オルガン、電子ピアノ、シンセサイザー、一段電子キーボードなどの電子鍵盤楽器を指す。学会設立前後の社会的背景をみると、今から約30年前の1984年に日本の楽器の生産額において電子楽器がアコースティック楽器を凌駕し、その後、今日に至るまでこの傾向が続いている。しかしそれらを専門的に研究する団体は、ヤマハ音楽振興会に属する全日本電子楽器教育研究会しかなかった。

このような状態の中で、2003年9月に昭和音楽大学の第1回電子オルガン定期演奏会が開催され、下八川共祐理事長が次のような感想を述べた。それは“ハイブリッドオーケストラ、創造的スコアリーディング奏法、バイキーボードなどの用語や考え方がこのままでは一大学から外に広がらなくコップの中の嵐で終わってしまうのではないか。学会を立ち上げ、積極的に情報交換をしていく段階にきているのではないだろうか”というものであった。当時昭和音大の講師をしていた筆者が早速、高萩保治（東京学芸大名誉教授・イスメ名誉会長）、吉田泰輔（国立音楽大学理事長）、出田敬三（平成音楽大学学長）、中村誠（浜松学芸高等学校校長）他に学会設立の相談をした結果、これらの人たちを中心とした有志が発起人となって学会が発足されたのである。

第9回大会は以下のプログラムで行われた。

と き：2013年10月10日

と ころ：昭和音楽大学南校舎

あいさつ：二見修次（昭和音大学長）、出田敬三（平成音大学長）

基調講演：澤野優（ミュージックトレード社社長）

総 会：2012年度下半期～2013年度上半期

パネルディスカッション：電子オルガン ML（ミュージックラボラトリー）

研究発表：電子オルガン関連（森松慶子、金銅英二、宮本賢二郎）

ML および学校音楽（阿方俊、初山正博、井上洋一）

研究コンサート：電子オルガンアンサンブルによるピアノコンチェルト

20世紀に出現した電子楽器は楽器として未だ発展途上段階にあるため、演奏や教育関係者は産学協同の点から意思の疎通が重要になってくる。この点について、基調講演者の澤野優氏は楽器需用が時代と共に大きく変化して電子楽器時代になっていること、そしてアジアの楽器メーカーが世界をリードしていることを述べた。翻ってみると、アコースティック楽器の場合は、演奏、教育、理論において欧米にその範とするものがあるが、電子楽器の場合は残念ながらないといえる。楽器というハード面でアジアが世界をリードしているのであればソフトとしての演奏、教育、

研究の学際的分野で一層の発展が必要であり、当学会の存在意義もそこにあるのではなかろうか。



写真：左からあいさつの二見修次／昭和音大学長と学会代表幹事の出田敬三／平成音大学長。右端は基調講演の澤野優／ミュージックトレード社社長

大会では、研究コンサートを会場毎に開くのが恒例になっており、今回は電子オルガンアンサンブルによるピアノコンチェルト3曲(1楽章のみ)の披露となった。このコンサートは特別に学会の研究コンサートのために構成されたものではなく、ピアノ演奏家コースの最終学年で必修となっているピアノコンチェルトをバーチャルではあるが、電子オルガンアンサンブルによるオーケストラサウンドで全員が体験するというもので、13年前に始まったものである。

コンサート全体では7曲が演奏されたが、研究コンサートではその第2部の次の3曲が演奏された。

- ・S. ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第1番嬰へ短調第2楽章・・・石渡洸貴(P)
- ・R. シューマン：ピアノ協奏曲イ短調第1楽章・・・田村爽月(P)
- ・W. A. モーツァルト：ピアノ協奏曲第20番二短調第1楽章・・・床島 愛(P)



シューマンのピアノ協奏曲。田村爽月(P)、寺島康朗(Cond)

電子オルガン演奏は電子オルガンコースの学生で1年から4年生の全員が担当。指揮は、授業で電子オルガンアンサンブル担当の寺島康朗講師。

ここで特記されることは、電子オルガン演奏者が6人の奏者用に編曲された楽譜でなく、オーケストラスコアを読みながら演奏していることである。このスコアリーディング奏法が普及してい

けば、ピアノを学んだより多くの人たちのピアノコンチェルトを演奏したいという夢が実現しやすくなる。これは欧米に範があったものでなく、日本発信の新しい独自の演奏形態である。

(あがた・しゅん 本研究会員)

## 福島日記 (24) 作曲 小西 徹郎



人の思いとはどれほどに重いのか？人は喜びも悲しみも究極の体験においてその思いを、体験を分かち合うことは不可能に近いであろう。命の重さは思いの重さに少しだけ似ているような気がしてならない。

今月号は前月号の続きである。薄磯地区で10歳の若さで亡くなってしまった鈴木姫花さん。「10年後の自分へ」という題の作文にはデザイナーになりたいという夢を持っていた姫花さん。そして彼女の描いた一枚の絵画、この絵画に私たちは心を打たれた、そのことから始まった「薄磯区 慰霊碑建立基金」への寄付のためのプロジェクト。この発起人は、英国社団法人 Future Trust 理事長の加藤宏史さんである。加藤さんは音楽を通じて基金への寄付を考えている。その内容は「FUKUSHIMA Keep the Faith Vol. II」というタイトルのベネフィットCDのプロデュースである。

このベネフィットCDの打ち合わせをしている中で私たちはある問題点にぶち当たった。何故このCDを制作し販売した金額を寄付とするのか？お金であるならば制作せずにそのまま寄付すればよいではないのか？そのような思いにかられた。私たちは再びこのCDを制作する必然性を思い返してみた。何故？何故？CDを、音楽を作るのか？よく考えてみた。私たちは何がきっかけでこのプロジェクトを始めたのか？そのきっかけは姫花さんの塩屋埼灯台を描いた一枚の絵画だ。この一枚の絵画に心を打たれたのだ。私たちは音楽を創造し、その音楽に信念と思いを込めてその音楽によってどんなに時が過ぎ去ってもこのことを風化させない、そしてこの悲劇を悲劇だけに終わらせずに、祈り、鎮魂の思いにかえていくためにこれらの音楽を創るのだと。だから、基金に寄付をすることは大切な目的だが、慰霊碑を建立することと音楽によって祈ること鎮魂の思いをこめることはまったく同じ思いであることを再認識したのだ。

このベネフィットCD、ここに収録される楽曲のテーマは東日本大震災で喩えられる「大自然と人々との葛藤」と3.11を風化させず後世へ語り継ぐ「ふくしまの信念を貫く」為の「Symbiosis」のコンセプトと「FUKUSHIMA Keep The Faith」の構成で作られる。そして、世界中で活躍している作曲家たちがこのテーマに真摯に向き合い作曲をし、その音楽を英国王立音楽院を首席で卒業し、現在プロとして海外諸国で演奏活動をしている英国の女性バイオリン奏者で結成されたデュオ

「RETORICA」(Harriet Mackenzie と Philippa Mo の2人)の演奏、録音をし、日本からは伊達 誠作品「Keep The Faith」などが収録予定となっている。リリースは2014年3月12日だ。Wasabi もこのリリースのために Future Trust と同様に走っているところである。



そして3月12日には「RETORICA」の二人に来日していただき、郡山市で彼女たちのマスタークラス（ワークショップ）を行う予定である。完成したCDを告知する目的は当然ある。売れなければ基金への寄付ができないからだ。だが、それだけではない。音楽都市宣言の郡山市の中学校高等学校には素晴らしい合唱部や管弦楽部が多くあり、郡山市はとても豊かな音楽の街である。そんな郡山市で行われる「RETORICA」の二人の音楽とマスタークラス。音楽を通じて人の心に「人を思う」ということを若い学生や音楽を目指している若者たち、学生たちへ伝えたい、その気持ちで、思いでこのマスタークラスは行われる。この東日本大震災によって被災された方々が人として人を思う、祈る、鎮魂の思いを刻み、伝えていく、そこに音楽はとても大切なものとなるのだ。そのことを「RETORICA」

の二人に託したいと思う。

普段、音楽を生業として生きているが、この度ほど、音楽を伝えていく、音楽に思いを込めることの大切さを実感したことは今までなかった。音に込める思い、この思いとは肉体の奥から湧き上がる血潮にも似ている。忘れてはならない記憶は血潮にも似た感情のエネルギーによって留められるのだろう。そこには常に音楽がある。

10月号から11月号の2ヶ月にわたり書いてきた薄磯地区の津波、姫花さんの一枚の絵画、そこから始まったプロジェクト。薄磯地区の方々、姫花さんとそのご遺族、Wasabi、FSG カレッジリーグ、そして小篠弘子さん、鈴木由利佳さん、鈴木尚子さん、加藤宏史さんに心からの感謝の気持ちと、そして、被災なされた方々の気持ち、思い、そして亡くなられた方々への祈り、鎮魂の思いを忘れずにこれからの人生を生きていくであろう。そしてこの連載を通じて未来の人たちにつないでいくであろう。

（こにし・てつろう:本会理事）

（挿絵：前川久美子（まえかわ・くみこ 山口芸術短期大学在学中）

# 《明日の歌を》— 楽友邂逅点 ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

## 第九回 渡辺宙明 劇伴人生 ～ヒーローと伴(ともに)に (2)

情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。

九回目は、今年米寿を迎えた作曲家、渡辺宙明氏。前回対談は、2008年10月。その後5年が過ぎ現在御年88歳。インタビュー以降、現在の心境も変化しつつあるという。今も現役で活躍される渡辺宙明氏の米寿を記念し、2008年対談内容を基本に、この5年間の思いを語っていただくべく再インタビュー。新たな気持ちでお届けします。

### ■渡辺宙明 (わたなべ・ちゅうめい /作曲家)

本名、わたなべ みちあき(漢字同じ)：作曲家・編曲家。1925年愛知県生まれ。東京大学文学部心理学科卒業。團伊玖磨、諸井三郎、渡辺貞夫の各氏に師事。卒業後、日本初の民放ラジオ曲、中部日本放送(CBC)にてラジオドラマ「アトムボーイ」でプロデビュー。その後上京、映画・TVドラマ等、多くの音楽を手がける。代表作に「人造人間キカイダー(1972)」「マジンガーZ(1972)」「秘密戦隊ゴレンジャー(1975)」「太陽戦隊サンバルカン(1981)」「宇宙刑事ギャバン(1982)」、の音楽など主題歌、挿入歌、BGM等多数。近作では「海賊戦隊ゴーカイジャーVS宇宙刑事ギャバン THE MOVIE (2012/山下康介との共作)」等がある。



### ■橘川 琢 (きつかわ・みがく /作曲家・日本音楽舞踊会議理事)

作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。『新感覚抒情派(「音楽現代」誌)』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価値を追究している。

(Website) <http://www.migaku-k.net>

### ■映像と音楽1・・・作曲技法や作曲スタイルについて

——具体的に作曲についてお聞きしたいと思います。ラジオから映画へ。ドラマに「映像」が加わるようになるわけですが、「音声」のみのおときと比べて大きく変わったことは何でしょうか？

「セリフだけのラジオと比べ、絵が入ると絵に合わせなければならない。雰囲気も大事だけど、その画面々々にあわせることが出てきますね。『絵に合わせる』という条件があります。ラジオの時は、セリフによるムードや雰囲気をつかんで曲をつける。ストーリーのほかに映像の画面に合わせるという条件が加わりますね。

こういうシーンにはこういう音楽、という手法が豊かになればなるほどいいですね。この場面にはこういう音楽も考えられるという。テレビではなく、劇場用のもので十分に楽想を練って作曲した時に大きな成果を上げることがあります。今のテレビでは、まず経費の制約があり、溜め録りの場合も多いです。」

———1959年、テレビ用音楽に進出して、映画の音楽とテレビ番組の音楽を平行して作曲されている時期が続いていらっしゃるんですね。単発ものにしても「映画」の単発物と「テレビ」の単発もの場合は、作曲上の大きな違いはありましたか？

「大きな違いはないと言っていいでしょうね。大画面と小画面による違いがないとは言えないですが。」

———音楽の創り方ですが、例えば部分にピンポイントでつける場合と、多少長めに一曲として作られる溜め録りの場合があるとお聞きしましたが・・・

「溜め録りというのは、これからどういうふうになるかわからんけど、大体の意図・ストーリーしかわからない段階で作ってしまう。使われそうな音楽を書いておく。あとは監督と選曲者で選びます。」

———そういう時は、この曲はこう使われるという予想を立てながら作曲を・・・？

「ええ。でも時にはね、使われそうに無いような曲も書きたいじゃない（笑）。やりたい曲を混ぜたくなくて5つのうち1つぐらい混ぜてみたりね。でもそういうのも書いてあると（監督や選曲者が）使っちゃうみたいで・・・まあ、新鮮さが出ることもありますね。」

例えば、「追跡」のシーンの音楽で出しか追跡の場面合うように作って、その後トランペットソロで歌い上げるようなメロディを作るのです。もちろんカッコいいリズムセクションをつけてのことですが。（宙明先生、トランペットが歌い上げるようなフレーズを口ずさむ）。だけどやっぱり無理やりはめ込んだ感が出てしましましてね（笑）。だからそういうことは滅多に出来ない。



それでも僕の場合、映像がないからこそ、そこで意表をついて破天荒なもの書くことができたから、今でもBGMでもインパクトがあって好まれているようですよ。特に僕の場合、特撮モノが非現実的だったのが幸いした。溜め録りでそういう曲を作り、『持ち味』の出せる世界に入って行けたとも言えると思います。」

——ピンポイントで作曲する場合、映像の尺に合わせてきっちりと収めるように作曲するという、シビアな創作現場だったのでしょうか。

「それは劇場映画でね。作ってきた曲が多少長い時は一部をカットしたりテンポを上げるかして映像の長さにあわせるのです。最近はその辺の事情がどうなっているか知りませんがね。ラッシュを見ながらストップウォッチで秒数を記録しながら台本にメモをしていくんです。それに対して編集打ち合わせがあるのはだいぶ後で、ほとんど出来上がってからですね。そこから曲を書いていたんじゃないんですよ。」

——昔の映画作曲家は、依頼が来てから3日で全曲作らされるなど、伝説的なお話を時々耳にしますが・・・。

「まあ、3日前に急にやれというのは、映画の場合というのは滅多にないと思います。予定していた作曲家が倒れたとか、ピンチヒッターではあるかも知れませんがね。」

ただし、最初の完全な打ち合わせをしてから録音まで時間が短い。さらに打ち合わせの段階では作曲の時間は十分とってあるけど、撮影の方が必ず延びる。雨が降ったりしてロケの撮影が遅れ、ギリギリまで編集が延びたりしてね。

それで、編集が出来上がるのが録音前日の夜ようやくということもありましたね。深夜電話がかかってきて『やっと編集が出来上がりましたから、これから来てください。』。でもこれから行ったんじゃない作曲が間に合わないから『秒数だけ教えてください！』ということもありましたね。封切りの日は決まっていたから音楽の録音日を延ばすわけにはいかないのです。」

——では、こちらが気を利かせて、打ち合わせの前に作り始めて・・・

「ええ、だから最初に台本を読んだときに、作り始めます。絵が無い時に台本と企画書を前にしてプロデューサーと話して、シーンに合う音楽を自分なりに考えてはみます。あとは、主なテーマを考える。タイトルバックはこんなのがいいかな、とか。しかし、本格的な打ち合わせをしないと使用できる曲すべてを作ることは不可能ですね。」

## ■映像と音楽2・・・映画音楽論、イメージを音にすること

——音楽を作る時の着手方法についてお伺いしたいのですが・・・

「これは色々な場合があるので一口ではいえませんが・・・メインテーマはドラマ全体を象徴するような音楽を考えます。あとはドラマの内容、監督の意図から作っ



てゆく。どんなものでもいいか自分で決めてゆきます。オケであれば厚い編成、薄い編成・・・また時代劇と現代劇ではメロディも違ってきますよね。」

———**楽器編成はどのように決めてゆくのですか？**

「楽器はこちらから選ぶこともあり、予算を考えながら監督やその他のスタッフが指定することもあります。勿論、絵（映像）がこの楽器を欲しているということもあります。私にとって初めて映画『人形佐七捕り物帖』では、中川監督がギターのための音楽で行きたいという注文があったので、作曲に新人をとということで私が選ばれたのです。



『第三の男』なんかギターソロのみのBGMですよ、これは。監督がやりたいと。他のプロデューサーは『ギター一本なんて』とんでもないと大反対した。でも頑として動かなかった。これが白黒映像にバッチリ合っていました。監督の腕前が素晴らしかった。他の音楽の代用が考えられないくらいにね。これで大成功した。映画史上の大傑作となっています。逆に最近の映画では、それぞれがぴったり合い過ぎて、印象が薄く感じられるものもあります。」

———**お好きなキー（調性）は？**

「ああ、それはない。好きなキーなんて無いんです。一つ一つの調性に個性はないと、僕は考えています。振動数、ということで考えるとね。それよりも重要なのは歌手と楽器の問題ですね。まず歌手の歌いやすさを考えてあげる。歌手が決まる前でしたら仮のキーで作曲しておいて、決まったら歌手の音域に合わせて移調するというように。他には、僕の場合特にブラスが活躍するので、フラット系が多くなる。移調楽器の時に記譜が複雑になることも考えなくてはいけない。

第一、ピッチというものを考えると、ヨーロッパのオルガンでもそれぞれの地方で違っていて、歴史的に見てもピッチが変化しています。モーツァルトの時代のピッチは現時のそれよりうんと低かった。カラヤンが生まれた時のAは435Hzだったはずですが、彼はベルリンフィルでは445から446で演奏させたようです。

（続く）

※次回は「映像と音楽」について、現場での実際の作曲方法を引き続きお送りいたします。

（インタビュー 於：2013年9月6日 渡辺宙明邸にて）

## 報告 CNDJ2013年 オペラコンサート『愛の葛藤』

先月号のグアビア写真の速報で紹介しましたが、9月26日(木)18:30より、すみだトリフォニーホールにおいて、CMDJ 2013年オペラコンサート『愛の葛藤』～ヴェルディ、ワーグナーとその周辺の作曲家によるアリアコンサート《ヴェルディ、ワーグナー生誕200年にちなんで》の公演が行われました。

実を申しますと、当初は後半の演目としてドヴォルザークの歌劇『ルサルカ』の縮小版の公演が計画に上っていたのですが、幾多の困難な問題が立ちはだかったため、4月に入った段階で、今年が生誕200年の年に当たる、ヴェルディ、ワーグナーの作品を中心としたガラコンサートとするよう、計画を変更しました。出演者の募集に入った段階で、ヴェルディとその前後のイタリア歌曲のアリアについては、希望者が多く、人選、選曲は比較的楽だったのですが、危惧した通りワーグナーとその周辺の作曲家の作品については、希望者が少なく、人選と選曲に苦労しました。幸いに会員の笠原たかさんが、ワーグナーの『タンホイザー』のアリアと歌曲の歌唱を承諾してくれ、また新参加の箕浦綾乃さん、実川裕紀さんが、フンパーディンク、マスネ、リヒャルト・シュトラウスの作品を歌ってくれることになり、最後に全員で歌った『ローエングリン』の「婚礼の合唱」を加え、「ワーグナーとその周辺」のプログラムも、なんとか様になるところまで漕ぎ着けました。

当日の演奏曲は《前半》のプログラムが、①ドニゼッティ：『連隊の娘』より“望みはないわ～フランスに敬礼！”原田智代(Sop.)／②同『愛の妙薬』より“人知れぬ涙”神林淳(Ten.)以下はヴェルディの作品で：③『仮面舞踏会』より“ここは恐ろしい場所…”④『オテロ』より“アヴェマリア”高橋順子(Sop.)／⑤歌曲『6つのロマンス』より“孤独な部屋で”、⑥『リゴレット』より“慕わしい人の名は”今井莉紗子(Sop.)／⑦『リゴレット』より“女心の歌”土屋清美(Ten.)／⑧『椿姫』より“ああ、そはかの人か～花から花へ～”柴田紗貴子(Sop.)／⑨同“ひとりきりじゃおもしろくない”神林淳(Ten.)

《後半》のプログラムは ①フンパーティンク：『ヘンゼルとグレーテル』より“踊りましょうよ”(二重唱)箕浦綾乃(Sop)・実川裕紀(M-sop.)／②ワーグナー：『タンホイザー』より“エリザベートの祈り”、③、④ 歌曲『ヴェーゼンドンクによる5つの詩』より“痛み”、“夢”笠原たか(Sop.)／⑤マスネ：『ウエルテル』より“手紙の歌”実川裕紀(M-sop.)／⑥R・シュトラウス：『ナクソス島のアリアドネ』より“偉大なる王女様”箕浦綾乃(Sop.)／⑦プッチーニ：『つばめ』より“ドレッタの素敵な夢”柴田紗貴子(sop.)／⑧同『マノンレスコー』より“なんとすばらし美女”土屋清美(Ten.)／⑨ワーグナー：『ローエングリン』より“婚礼の合唱”参加者全員 という作品が丸数字番号の順に演奏されました。

後半の終わりの方に、プッチーニのアリアを持って来たのは、ドニゼッティ、ヴェルディの曲の分量が多く、時間的なバランスも考えたからですが、それだけでなく、プッチーニのアリアは、歌い手にそれだけの技量が備わっていれば、お客さんをうっとり魅了させる力を持つので、新進気鋭の若手ソプラノ柴田紗貴子さん、

年を経てその美声にさらに磨きをかけたベテラン・テノールの土屋清美氏にそれを託すことで、コンサートを締めてもらおうと思ったからですが、この試みは成功でした。

例年ですと、舞台公演に向けての合同練習が何度も行われ、私もずっと練習に参加し、その都度、習熟の程度を確認出来たのですが、今年の場合は、9月23日の総稽古（全員参加）までは、合同練習は行われず個別練習だけでしたので、その間は亀井さんに任せっきりで練習に立ち会わなかったため、習熟の程度が確認出来ず不安でした。そういう事情もあり、例年ですと、どなたかに当日の批評を頼んでおくのですが、今回はそれも躊躇してしまいました。しかし、9月23日の総稽古に立ち会った段階で、不安はかなり解消されました。正直言って個々の演奏の出来映えにはバラツキがありましたが、出演者が頑張っ、それぞれの良いところを出来るだけ発揮しようとしていたからです。

また、近年の本会のオペラコンサートは若い人達が中心でしたが、今年はベテランと若い人達の混成部隊で挑みました。そういう中で土屋清美氏、笠原たかさんなどが、若い人の範となるような円熟した芸を披露してくれました。

しかし、今年もこれから伸びて行きそうな若い歌い手達の歌と演技が、ステージをより生気溢れるものにしたと思います。舞台狭しと飛び回り歌ったヘンゼルとグレーテルの二重唱などは、はちきれそうな若さを感じられましたし、曲の変化にともない表情、雰囲気のが別人のように変わる変化に、意欲と対応力を感じました。若い人の芸はまだ未熟ですが、「突っ立って歌だけ歌うのではなく、出来るだけそのオペラの場面の雰囲気を感じさせるように表情、仕草など工夫して欲しい」という私の要請に、一生懸命に答えようと努力している姿を見て、嬉しく、そして頼もしく感じました。また、難曲に積極果敢に挑戦する姿勢にも好感が持てました。本会のオペラコンサートの目的について短くいうと、芸術性を凝縮した独自のスモールオペラの公演形式を生みだし、オペラの魅力を広く伝えること。若い人材を育成し、世に送り出して行くことにあります。今回も若い人達がベテランの芸に刺激を受けながら、色々吸収し成長して行こうとしているのを見て、この企画はまだまだ続けて行く意義があるなど、改めて思いました

今年聴衆動員数は190名と例年より少なめでしたが、途中で計画が変更になり、宣伝活動も不十分だったことを考慮に入れるとまあまあ来客数だったといえるでしょうし、来場した方々からは、「内容的にもバラエティーに富み、充実した楽しいコンサートだった」という評価をいただきました。しかし、例年に比べ、会員の来場者が少なかったのが心残りです。

最後に、第1回のコンサートからずっとその中心にあり、巧みな司会でお客さんを楽しませ、出演者を勇気づけ、若い人達にさりげなくアドバイスを与えてくれる佐藤光政氏、伴奏をすべて一人で引き受けるという難事業をずっと続けてこられた亀井奈緒美さん、ご苦労様でした。それに、毎年、裏方をつとめてくれる、舞台監督の橘川琢氏、録音の高島和義氏、練習会場の手配などをやってくれている、実行委員の浦富美さん、お疲れさまでした。みなさん、来年も一緒に頑張りましょう。

（報告者：オペラコンサート実行委員長 中島洋一）

## ～オーケストラ・トリプティーク第2回演奏会～

9月19日、浜離宮朝日ホールで催されたこの公演は評論の西耕一の企画構成によるもので、タイトルにある様に既に没している過去の重要な作曲家、現在活躍中の作曲家、若手作曲家の作品が取り上げられた。西によると、今回はフル編成のオーケストラでは無く、プロ奏者による体系的な演奏会が比較的少なかった弦楽オーケストラに絞り込んだと云う。それと、演奏会であまり演奏されない過去の作品が取り上げられたのと同時に映画音楽がその一部に含まれていたのも特色の一つだろう。また、弦楽合奏だけでなく協奏曲が3曲含まれていたが、弦楽だけだと起こり得るサウンドの平板さに変化をもたらす上でもこの選択は効果的だったのではないだろうか。

最初の曲は芥川也寸志「Music for Strings #1(1962)」

この曲は、盟友・武満徹に捧ぐ＝となっている。その名の通り、芥川が武満の音色やハーモニーの特徴を捉え武満だったらかくあろうと作曲したもので良く武満音楽の響きの特色を掴んでいたと云える。これを個性のない作品と見る向きもあるかも知れないが、むしろ武満へのオマージュとして彼の繊細さを肌で感じ取り音楽として発信出来るデリカシーに富んだ芥川の才気と職人氣質にこそ私は、注目したい。

次は、黛敏郎 「ヴァイオリンソロと弦楽オーケストラのためのカプリチオ」江藤俊哉に捧ぐ。リズムや、オーケストラのフィギアに黛独特の個性的な才気は感じられはしたものの饒舌でスケールが大きく、それだけにややもすると通俗に流れる嫌いのあったこの人のそちらの面が少し勝っていた曲の様に感じられたのだがどうか。又、ソロヴァイオリンの演奏は無難でそつなく聞こえたのだが黛の作品に共通な遊びの精神がもっと欲しいと思ったのは筆者だけだろうか。3番目は池辺晋一郎の作曲による映画音楽、「姑獲鳥の夏」より「成熟へのプロセス」。(原作、京極夏彦 監督 実相寺昭雄によるオカルティックなミステリー) 不安げなテーマが現れそれらがいろいろ、場所を変えつつ進められて行く仕組みだが、映像と合わせて完成される様に書かれた作品だけにコンサート用の作品と並べて演奏された場合、どうしてもその薄さが気になってしまう所ではある。私等はその事を差し引き聴く事が出来るが、やはり一般聴衆向きには、映画の筋立てや、使われた箇所に対する説明が簡単でも良いから必要なのではなかろうか？今後企画者に考えてもらい所ではある。

次も松村禎三の書いた映画音楽が続く。「TOMMOROW 明日」原作 井上光晴 監督 黒木和雄。これも池辺作品で述べたのと同様、筋立てや使われた場面への言及が必要であろう。もしプログラムに原爆が投下される1945年8月9日迄の長崎の数日間を描いた作品であると云う注釈があったなら、幼児が遊ぶがごとき穏やかな旋律が続いた後の強烈な打楽器の打撃音の持続を聴衆は、想像力を持って理解出来た

のではないだろうか？又、シンプルな旋律の中に松村の個性の片鱗（ギリシャに寄せる二つの歌に見る様な）が垣間見えた事も付け加えておこう。5曲目は依頼作品で若手の鹿野草平作曲の「ヴィブラホン、金属打楽器と弦楽のための協奏曲」打楽器の素早いパフォーマンスを見せる曲で若々しくテンポは超速で視覚的な面白さを伴った曲。しかし難点を云えば中間部が割合平板なせいも、単なる息抜きに聞こえてしまったのは残念である。音色の変化や、和声的色合いの変化、モードの変化など、もっと考慮されていたらずっと効果的であったらと思うのだが。又打楽器ソロの會田瑞樹のスピード感溢れる熱演も特記すべきであろう。

休憩後はヘテロフォニー等の手法を駆使して独自のスタイルを展開して来た西村朗の作品。東京音楽大学100周年記念として書かれたもので。西村の自然や自然界の持つエネルギーへの畏敬が弦楽器の奏法、音色を伴って表されていた。コンチェルトとはなっているがヴィオラと弦楽オーケストラは通常のコンチェルト程の対立関係では無く合い対立しながらもいずれは融合して行く様に作られていたようである。雰囲気的にはアジアを感じさせる曲だがそのアジアも亜熱帯、熱帯の東南アジアを感じさせる熱いエネルギーな音楽であったし、この日の白眉だったと言える。また、ヴィオラの伊藤美香の的確であり又気合いの入った演奏も特筆すべきであろう。次は、かつてミュージックセリエルや多くの前衛手法全盛だった時代、諸井誠との音楽芸術上での論争が話題になった、伝統派の代表、別宮貞雄の「弦楽オーケストラのための小交響曲」。1952年の作とあるので12音技法が全盛を誇った時代と一致する。それへのアンチテーゼとしては当時意味を持ったものと推測されるがスタイルは一時期のストラビンスキーやその他の新古典派のスタイルを踏襲している様に私には聴こえた。確実な技法と構成に支えられた曲ではあるが、別宮の生の声を私は聞き取る事が出来なかった。最後の曲は水野修孝の「満月の夜に」。作者によるとオペラ「美女と野獣」の第2幕の冒頭からの部分を独立させ器楽作品にしたとある。水野はジャズのビッグバンドの手法を取り入れ、一連の交響曲を書いて来ている。この曲は、ジャズの手法の影響と云うよりは昔懐かしいハリウッドの映画音楽のリニューアルの様に筆者には聴こえた。今回の現代作品の中で音楽観そのものが他の作曲家とまるで異なる様に見えたと言ふ点で最も目立った作品だったと言える。つまり、今回の公演の中で一般の聴衆にも最も理解し易いポピュラー音楽に近い作品で、ある種の人々には心地よいムードミュージックとしても成り立つのでは～と云うのが筆者の率直な感想である。

最後になるが、この企画、好企画なので更に発展的に続けて行って欲しい。又、映像を伴う音楽については先述したが、幾分の注釈が必要と思われるので次ぎにこう云う題材を扱う時は考慮すべきと思うのだが。

(2013年10月20日 北條直彦 記)

## 三善晃氏追悼

作曲：北條 直彦

三善晃さんが亡くなりました。音大生時代、短い期間ではありますが末席で教えを受けた者の一人として本当に残念でなりません。今、訃報を聞き、かつて受けたレッスンの状況が思い出され、甦ります。作曲のレッスンを受けている時、私の行き詰まった箇所を「こう云うのは？」と仰りつつピアノに向かいその箇所のいくつかの解決策を素早く、勿論、素晴らしい、即興で弾いて下さった事が何回もあったのですが、その箇所にぴったりとも思えた、リズムの切れや響きの持つ迫力は今でも私の記憶に強く残っています。当時、家に帰ってから、それ等を手練り寄せようとした事が何度もありましたが、今、思えば実力不足からなのではないでしょうか、なかなか音を掴みきれず四苦八苦した事も懐かしい思い出となりました。そして、その当時音楽に取り組む姿勢を実地で経験出来た事は私の財産ともなり、今でも私の中に生きています。又、池内さん（池内友次郎先生）は滅多に人を褒めない先生でしたが「矢代（矢代秋雄）はプロだ。松村（松村禎三）は何か自分の道をやっているようだ。三善はすごい」と、よく仰っていた事も、最近の事のように思い出されます。その後、三善さんとはお付き合いは無くなりましたが、レッスンでの体験は現在も私の中では音楽創作の指針の一つとなっています。70年代以降、三善さんは戦争3部作（「レクイエム」「詩編」「響紋」）等により西洋の立体的技法とそれとは対極にある日本的なるもの、東洋的なるものの融合による新しい独自の世界、三善スタイルを完成されました。それは、日本の音楽史への大きな足跡とも云えるでしょう。戦中派、戦後第一世代の作曲家が次々と亡くなられ、そして、三善さんも亡くなられました。「大きな星が落ちた」と云う実感と一つの時代が終わったと云う感慨が何か私を捉えて離しません。三善先生、有り難うございました。心から、ご冥福をお祈り申し上げます。

---

**日本人的嗜好「かわいらしさ」を、新たにキラキラと輝かし得た稀有な人**

— 亡くなった三善晃に捧ぐ！

作曲：ロクリアン正岡

私が芸大二年まで師であった三善晃。その妖精のようなマスクとあたりを払う知的雰囲気は他からは感じられないものであった。事実、弟子の資質を見抜くのも早く的確であった。

後年、かの有名な辛口の哲学者、中島義道が電話で「彼の話をもつて某カルチャー講座で聴いて来たが、彼は大学者なんだね、、、だから挨拶してきた」と驚いた様子を示したことがあった。1970年ごろのことだが、「ベートーヴェンの創作法は、直線を引く、その上に直線を引く、それを何回も繰り返す～」と動作を交え語り「それを思うと怖くなる。だから、この頃自分は作曲が出来なくなってしまった」と。入学したての私にすら「自分の過去の作品なんて恥です」と語っていた彼。一方で「気違いになったつもりで作曲をやれ！」とも。沢山出てきた作品達のキラキラとした感覚美は他の比ではなく、まさに「才能ショー」。だが、高度で厳めしさすらある



8/9月号の「私の『未完成』論 ～正岡さんの所説によせて～」と、10月号の「『変奏曲形式』への疑問」を読ませていただいた。

### 「未成交響楽」について

確かに、シューベルトのソナタ形式の楽章など、例えば有名どころの弦楽四重奏曲、弦楽五重奏曲一つとっても、主題の力みかえった展開に軋みを覚えることが少なくない。シューベルト本人の内なる欲求によるものではない不自然さがあるのである。ただ、こと「未完成」の場合には、第一楽章、第二楽章いずれの展開部分においても、そのようなことがない。助川氏は第一楽章を例にとり「天国的な、優美で、愁いを含んだ主題が、展開部で、強引なほど断片化され暴力的に乱入され forte の tutti に犯させる場面、か弱い乙女が無粋な力仕事をさせられているように私には聞こえる」といわれる。が、氏以外にそう感じる人がいるのだろうか。むしろ、普段のシューベルトの楽曲の場合と違って、深淵へと引き込まれるような印象を受けるのではなかろうか。そして、展開部では、その、ともかく美しい女性が異界の何かとてつもなく大きな力に憑依される劇的な場面に痺（しび）れる思いがするのではないだろうか。私には、それを書いているときのシューベルトのいわば音楽脳自体がそういうものに憑依されていたように感じられてならないのである。

この文章（実質的には私への反論になり得ている）については、助川氏の偏向性は否めなくとも鋭さがあって、議論する楽しさがないとは言えない。

ただ、強く疑問を覚えるのは10月号の方だ。

### 「変奏曲」の必然性について

文章は巧みだし風格すらあるのだが、問題はそのような「うわべ」に非ず「内容＝本質」にあり、である。

西洋クラシック音楽の変奏曲を否定するとは、クラシック音楽全体を否定することにつながりはしないか？別に変奏曲でなくても、たいていは主題を立ててそれを徐々に変化させてゆく。もっと還元していえば、第一音があって次々と後の音が続く。時間は前に進むのだから当然だ。誰がそれに逆らえるというのか？（西洋に限りはしない）

とまれ、変奏曲に話を絞ろう。

「主題が本質、本体」で、「変奏はそのうわべの変容」とは悲しい話である。

そのような思想からはろくな変奏曲は生まれまい。早い話、助川氏が指摘するような下らない変奏曲は山とある。ついでに、もし、往年の西洋クラシック音楽はそのような意味で「主題」とすれば、明治以降の日本のクラシック音楽はその「変奏＝うわべの変容」と言えそうではないか。

変奏の極意については、やはり一流の変奏曲を念頭に考えたいし、また自らもそういう変奏曲を作るべきではなかろうか。





あるとき、吹奏楽部の顧問の先生から呼び出しがあり、「校長が呼んでいるから校長室に来なさい」と言われ私は顧問の先生と一緒に校長室へ行った。校長はとてもうれしそうな顔をして「小西君、おめでとう！君が応募した作品が受賞したよ」と。私はとてもうれしかった。あまり明るいとはいえなかった高校時代、高校生活。だがこの知らせは当時の私にはとても前向きに生きていくための大切な結果であった。そして旺文社から賞状や盾が送られてきた。手にしたその重さがとてもうれしかった。審査員は冨田 勲先生と團 伊久磨先生であった。

学校がちょうど休みだったのだろうか、自宅にいたときに電話が鳴った。旺文社の全国学芸科学コンクールの事務局長からだった。とても穏やかな声で「おめでとう」と、お祝いのお言葉を頂戴し、コンクールの審査の現場についていろいろとお話をしてくださった。その中で「冨田さんがね、この子の将来を見てみたい、と言って君の作品を推してくれたんだよ」と仰った。私は冨田 勲先生のそのお話をきいて、「私の音楽に興味を示してくださった方の音楽を聴いてみたい」と思い、初めて冨田 勲先生のレコードを聴いたのだ。そして私はシンセサイザーを買ってもらいシンセサイザーの音楽にのめりこんでいった。テレビに冨田先生が出演されていると私は釘付けになって観ていた。この人が、この人が私に期待してくださったのだ、そういう思いと、何かを発見したい、そういう思いでテレビにかじりついていた。

その後、私は結局音楽大学ではなく一般の大学に入学し、当時は音楽で生きていく実力も勇気もなかったため一般企業に就職した。そして結婚し、マイホームも建てた。大変な仕事の中ではあったが時間を作り作曲をしていた。だが、2003年に音楽大学受験のときの友人たちが第一線で大活躍をしているのを目の当たりにし、私は自身の音楽を出していくことに更に力を入れ、準備を進めていった。海外のレコード会社からリリース、契約の話をしていただきそれをきっかけに退職した。借金があっては音楽で生きていけないと思い、繰上げ返済と退職金で住宅ローンを完済し音楽の道へ進んだ。ヨーロッパに行き、誰も自分を知らない場所で楽器を持ってハコに飛び込んで演奏をする、そんな毎日を送った。帰国してやっと営業を始め、仕事をやるようになった。38歳のときである。そこから更に広がり、今がある。

そのプロセスで音楽に対する考え方もどんどん変わっていった。変わらないのは自分自身という根っこだけだ。でも、最近気がついた。今私がやっていること、そして今の私の音楽のスタイルを客観視してみると（本当の自己分析、客観視は不可能であるけれども）高校時代にやっていることと殆ど同じことをしていることに気がついた。今現在、いろんなところを渡り歩いて、自分の居場所を探して、そしてチャレンジしてきたがよくよくみると今やっていることは高校時代のときとなんら変わりはない。もしかしたら冨田 勲先生は私がいずれはこうして音楽の道に進んでゆくことや私の音楽のスタイルが10代の頃に戻っていく、ということを見抜いていたのかもしれない。そんな気がしてならない。



# 若い翼によるCMDJコンサート 6

～ CMDJ Concert 6 for young musicians ～

2013年11月8日（金）19:00 開演

すみだトリフォニー 小ホール

主催：日本音楽舞踊会議 / 後援：月刊「音楽の世界」

## 《 ごあいさつ 》

本日はご来場いただきまして、ありがとうございます。  
当会「日本音楽舞踊会議」では、次世代の若い音楽家を  
育てるためのコンサートを各方面からのご支援も頂き  
ながら開催し、今回で第6回を迎える事となりました。

もうすでにプロとして活動をしている方、仕事を持  
ちながら音楽を続けている方、留学中の所を帰国して  
コンサートに出演している方など様々ですが、若い力が  
溢れる演奏に皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

日本音楽舞踊会議 代表理事 助川 敏弥、深沢 亮子  
理事長 北川 暁子  
公演局長 北條 直彦  
コンサート実行委員長 戸引 小夜子



## Programm

司会 佐藤 光政

- ◆ 浅田 容子 (ソプラノ)      上埜 マユミ (ピアノ)
  - 團伊玖磨            : わがうた より 「紫陽花」
  - 中田 喜直            : マチネ・ポエティックによる4つの歌曲「さくら横丁」「髪」
  - L. バーンスタイン : キャンディード より 「Glitter and Be Gay」
  
- ◆ 寒河江 真弓 (ピアノ)
  - W. A. モーツァルト : デュポールのメヌエットによる9つの変奏曲 K. 573
  - F. ショパン         : 即興曲 第2番 嬰へ長調 Op. 36
  
- ◆ 古川 亜希 (ソプラノ)      山木 千絵 (ピアノ)
  - G. F. ヘンデル       : ジューリオ・チェーザレ より「私は運命に泣くでしょう」
  - H. パーセル         : インドの女王 Z. 630 より「恋の病から」
  
- ◆ 小林 茉由(トランペット)、松本 加穂(トランペット)、  
金澤 佳都(ホルン)、中村 博道(トロンボーン)、若松 将正(チューバ)
  - J. クーツィール    : 金管五重奏 Op. 65
  
- ◆ 小崎 麻美 (ピアノ)
  - F. リスト            : 3つの演奏会用練習曲 S. 144 より 「ため息」  
リゴレットパラフレーズ S. 434
  
- ◆ 高松 久美子 (ソプラノ)      山木 千絵 (ピアノ)
  - V. ベッリーニ       : 6つのアリエッタより「優しい妖精、マリンコニーアよ」  
オペラ《カプレーティ家とモンテッキ家》より「ああ、幾たびか」
  
- ◆ 成田 真依子 (ピアノ)
  - S. プロコフィエフ : 束の間の幻影 Op. 22  
No. 1、2、4、5、7、8、9、11、16、14
  
- ◆ 木下 晶人 (ヴァイオリン)      安宅 薫 (ピアノ)
  - C. C. サン=サーンス /イザイ編 : ワルツ形式の練習曲 Op. 52-6 「カプリス」

## 《曲目解説・演奏者プロフィール》

### 1. 浅田 容子 (ソプラノ) 上埜 マユミ (ピアノ)

團 伊玖磨 : わがうた より 「紫陽花」

Ikuma Dan : Ajisai

中田 喜直 : マチネ・ポエティックによる4つの歌曲 より 「さくら横丁」 「髪」

Yoshinao Nakata : Sakura-yokocho, Kami, from "The Poems of Matinée Poétique"

L. バーンスタイン : キャンディード より「Glitter and Be Gay」

Leonard Bernstein : Glitter and Be Gay, from "Candide"

◇「紫陽花」(作詩:北山冬一郎 作曲:團伊玖磨)北山冬一郎の詩集『祝婚歌』より詩をもちいた歌曲『わがうた』の第5曲目。紫陽花の佇まいに想い人を重ね、激しく恋焦がれるその心を歌った歌。

◇「さくら横ちょう」(作詩:加藤周一 作曲:中田喜直)日本語の音韻的開拓を目指し戦後に起こったマチネ・ポエティック運動の中で作られた詩より、歌曲集『“マチネ・ポエティック”による四つの歌曲』の第2曲目。桜を見ると思い出す、昔の恋を歌った歌。

◇「髪」(作詩:原條あき子 作曲:中田喜直)歌曲集『“マチネ・ポエティック”による四つの歌曲』の第3曲目。女性そのものを象徴するものとしての髪。その髪を通じて、女性の性と生を描く。

◇「Glitter and Be Gay」オペラ『キャンディード』より(作詞:リチャード・ウィルバー 作曲:レナード・バーンスタイン)男爵令嬢だったクネゴンデが、戦争に巻き込まれる中で犯されたりしつつもなんとか生きながらえ、その美貌と品のよさから大金持ちのユダヤ人と大司教の愛人になる。その落ちたわが身を嘆きながらも「でも贅沢は嫌いじゃないわ♪気にしないで陽気に生きていきましょ！」と歌うアリア。



#### 【浅田 容子 (ソプラノ) Yoko ASADA】

4歳よりピアノを主とした音楽教育を受け、17歳から声楽を始める。文教大学教育学部学校教育課程音楽専修卒業。その後、声楽の研究生として4年間研鑽を積み修了。声楽を西義一氏に師事。高校～大学時代、合唱指揮者片山みゆき氏の指揮する「うたびと“風”のつどい」メンバーとして、グレゴリオ聖歌や近現代作品の演奏や新曲初演などに参加。また、学内では学生指揮者として活動。在学中よりオペラ・ミュージカル・日本歌曲を中心としたソロやアンサンブルの演奏活動をおこなっている。ブログ

「無名歌うたいの成長記録」運営中。

動画サイトYouTubeにて歌声公開中。

#### 【上埜 マユミ (ピアノ) Mayumi UENO】

北海道出身。北星学園女子高等学校音楽科卒業。国立音楽大学音楽学部ピアノコース卒業。国立音楽大学北海道同調会演奏会に2008、2009年出演。ヤマハ音楽教室発表会にゲスト出演。国立ショパンアカデミー学院・サマーセミナーにてディプロマ取得。これまでに渡辺卓、浜尾夕美、戸引小夜子、エフゲニ・ザラフィアンツ各氏に師事。日本音楽舞踊会議青年会員。



## 2. 寒河江 真弓 (ピアノ)

W.A. モーツァルト : デュポールのメヌエットによる9つの変奏曲 二長調 KV.573  
Wolfgang Amadeus Mozart : 9 Variationen über ein Menuett von Duport D-Dur , KV573

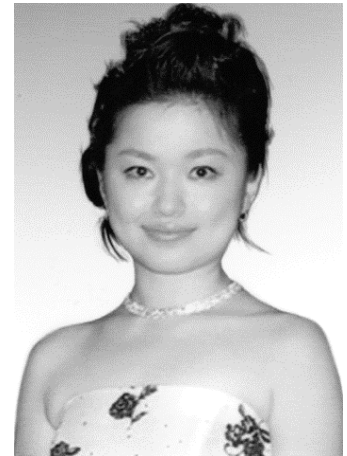
F. ショパン : 即興曲 第2番 嬰へ長調 Op.36  
Frédéric François Chopin : Impromptu No.2 Fis-Dur, Op.36

◇モーツァルト(1756-1791)デュポールのメヌエットによる9つの変奏曲 二長調 KV.573  
職をもとめてベルリン近郊のポツダムを訪れた際に、宮廷楽団の楽長であったフランス人のチェリスト、デュポールのために即興的に演奏された。1789年の作品。  
〈主題〉愛らしいお姫様が初夏のバラの花の咲く、爽やかな庭園を歩み進んでいく物語。  
〈第1変奏〉のびやかに、橋をわたって。木々の中を進んでいく。〈第5変奏〉一羽のキツツキと出逢う。自然界の生き物は人間にふれてしまうと弱くなってしまうのでしょうか、〈第6変奏〉突然息絶えてしまったキツツキを流れ落ちる涙とともに嘆き悲しんでいる。〈第7変奏〉キツツキがふたたび飛びあがり、〈第8変奏〉疲れて眠ってしまう。背中をぽんぽんと撫でる心地よい母の手の温かさを感じながら。どうやらこの物語は夢の中の出来事のように。鳥は空高く舞い上がり・・・〈主題回帰〉ふと目覚めるとお姫様はお庭で眠ってしまっていたようです。いつもの淡々とした日常の大切さと美しさを感じています。

◇ショパン(1810-1849)即興曲 第2番 嬰へ長調 Op.36 —— ショパン独特の優美な世界から湧きだされた小品。1839年、秋ごろの作品。やわらかい陽射しと風の吹く窓辺で思いに耽る一人の女性、優しい鐘の音にのせて懐かしい歌が聴こえてくる。

### 【 寒河江 真弓 (ピアノ) Mayumi SAGAE 】

国立音楽大学音楽学部器楽学科ピアノ専攻卒業。ザルツブルク・モーツァルテウム音楽院夏季国際アカデミーマイスタークラス修了。第15回日本クラシック音楽コンクール、第6回大阪国際音楽コンクールにて入選。第9回長江杯国際音楽コンクールにて奨励賞受賞。2006年、国際文化交流基金より助成を得て、ウクライナ・ドイツへ演奏旅行参加。これまでにピアノを杉田ひろ子、松川佳代子、草野明子、セルジオ・ペルティカローリ、深沢亮子の各氏に師事。現在、ピアノ研究会「翔」所属。



## 3. 古川 亜希 (ソプラノ) 山木 千絵 (ピアノ)

G.F. ヘンデル : ジューリオ・チェーザレ より「私は運命に泣くでしょう」  
George Frederic Händel : Piangero la sorte mia, from "Giulio Cesare"  
H. パーセル : インドの女王 Z.630 より「恋の病から」  
Henry Purcell : I Attempt from Love's Sickness to Fly, from "The Indian Queen"

◇インドの女王「恋の病から」—— 王位略奪を目論む「インドの女王」とペルーの勇者モンテズマとの戦いが主題となっているオペラ。J. ドライデンとR. ハワードの共作台本による「インドの女王」の第3幕で歌われる曲。アステカの女王センポアラは、自分がモンテズマを愛していることに気付くが、彼の愛はインカの王女オラツィアに注がれていることを知り、思い悩む。その複雑な気持ちを歌ったものである。ロンド風な形式(A-B-A-C-A)は、パーセルのフランス好きを表している。

◇ジュリオ・チェーザレ「私は運命に泣くでしょう」—— 命を狙われたチェーザレは、クレオパトラに逃げ道を教えられ、辛くも逃げ切るが、彼女は囚われの身となる。離れ離れになり更に、チェーザレが海へ投げ込まれたと聞き、彼の死を知り（本当は海岸に辿り着き、死んではいないが）、クレオパトラが 絶望して歌うアリアである。構成は、A-B-A。Aの部分は、自分の運命を嘆く、美しく切ないアリア。Bの部分は、アレグロで、チェーザレを殺した奴らへの憎しみを歌う部分。そして、Aの美しく切ないアリアが戻ってくる。



【古川 亜希 (ソプラノ) Aki FURUKAWA】

高校2年より声楽を始める。フェリス女学院大学音楽学部声楽学科首席卒業。飯田悠紀世、佐々木幸子、辻宥子、山下美樹に師事。「室内楽の夕べ」「声楽の夕べ」「オーケストラ協演の夕べ」「卒業記念演奏会」に出演。三宅賞受賞。kiの会会員。



【山木 千絵 (ピアノ) Chie YAMAKI】

国立音楽大学音楽学部器楽学科卒業。おもにアンサンブルピアニストとして活動中。飯田和子、戸引小夜子、山下美樹の各氏に師事。

---

4. 小林 菜由 (トランペット)、 松本 加穂 (トランペット)、  
金澤 佳都 (ホルン)、 中村 博道 (トロンボーン)、 若松 将正 (チューバ)

J. クーツィール : 金管5重奏 Op. 65  
Jan Koetsier : Brass Quintet, Op.65

Jan koetsier は、1911年オランダで生まれた作曲家、指揮者である。1927年～1934年までベルリン音楽大学で作曲、ピアノ、指揮を学び、アムステルダム・コンサートヘボウ管弦楽団の副指揮者となった。1949年～ハーグレジデンティ管弦楽団とハーグ王立音楽院で働き、1950年にバイエルン放送交響楽団のカペルマスターとなる。そして、1966年～1976年までミュンヘン音楽大学で教鞭をとった。作曲家としては、3つの交響曲、管弦楽曲、



室内楽曲、合唱、オペラなどの作品を残した。彼の作品は、パウル・ヒンデミットなど後期ロマン派の音楽の影響を受けている。その中でも金管楽器の特色を生かした活発な音楽、音色を楽しめる3楽章制の金管5重奏曲となっている。

【小林 茉由 (トランペット)  
Mayu KOBAYASHI】

東京都出身。東京音楽大学附属高等学校卒業。現在、国立音楽大学演奏学科トランペット専攻3年次、管弦楽コース在学中。これまでにトランペットを津堅直弘、金城和美、高橋敦、栃本浩規の各氏に師事。室内楽を林昭世、山本英助、井手詩郎、阿部麿の各氏に師事。2011年にピーター・マセウスのマスタークラスを受講。金管五重奏団「BRASS SPRITZER」、吹奏楽研究会「くにたちWINDS」、トランペット5重奏「Fiore」に所属。アンサンブル等の演奏活動の他、トランペットの指導も行っている。



【松本 加穂 (トランペット)  
Kaho MATSUMOTO】

13歳よりトランペットを始める。これまで、JBA ソロコンテスト九州大会にて金賞受賞。第42回熊日学生音楽コンクール管打楽器部門にて最優秀賞、熊本県賞を共に受賞。現在、国立音楽大学トランペット専攻、管弦楽コースに在学中。金管バンドサークル「くにたちブラス・クワイヤー」、吹奏楽研究会「くにたちWINDS」、トランペット5重奏「Fiore」に所属。トランペットを山本英助氏に、室内楽を井手詩郎、阿部麿の各氏に師事。



【金澤 佳都 (ホルン) Keito KANAZAWA】

長野県豊科高等学校を卒業。現在国立音楽大学演奏学科三年次在学。ホルンを井手詩郎、大野良雄、日高剛の各氏に師事。室内楽を井手詩郎、阿部麿の各氏に師事。

【中村 博道 (トロンボーン)  
Hiromichi NAKAMURA】

八王子高等学校芸術コース卒業。トロンボーンを森上慶一、箱山芳樹、藤原功次郎、小田桐寛之の各氏に師事。室内楽を井手詩郎、阿部麿の各氏に師事。ドレスデン管弦楽団首席トロンボーン奏者であるシュテファン・ラングバイン氏のマスタークラスを受講。在学中より日本フィルハーモニー交響楽団に出演。現在国立音楽大学演奏学科三年次在学中。



【若松 将正 (チューバ)  
Masaki WAKAMATSU】

現在国立音楽大学にチューバ専攻で在学中。チューバを池田幸広、柳生和夫の各氏に師事。室内楽を三浦徹、山本英助、井手詩郎の各氏に師事。声楽を矢田部一弘氏に師事。金管バンドサークル「くにたちブラス・クワイヤー」、アイネ・クライネ・ブラスアンサンブル、北日本金管五重奏団、Tuba Summit、MOVE UP TUBA に所属。



## 5. 小崎 麻美 (ピアノ)

F. リスト : 3つの演奏会用練習曲 S. 144 より 「ため息」  
Franz Liszt : "Un sospiro" Trois études de concert, S.144

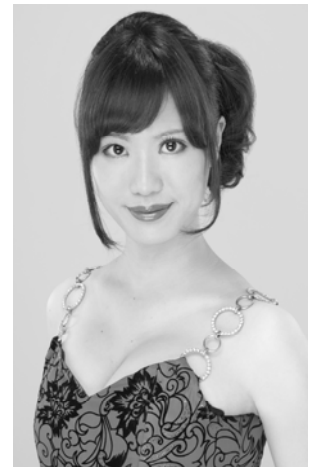
リゴレットパラフレーズ S. 434  
Rigoletto Paraphrase de Concert, S.434

◇3つの演奏会用練習曲より 第3番 変ニ長調「ため息」—— 広範囲にわたるアルペジオの伴奏上を、感傷的で甘美な旋律が歌っていく。この旋律は右手と左手で交互に演奏されるように書かれている。旋律と伴奏を楽譜上で判りやすくするため、珍しい3段譜で書かれている部分があるのも大きな特徴である。

◇リゴレット・パラフレーズ —— 「リゴレット」は1851年にローマで初演されたヴェルディのオペラで、リストはモーツァルトからワーグナーにいたるまでのオペラの主にアリアをピアノ演奏用に編曲している。この曲は演奏される機会が多く数あるリストのオペラ編曲ものの中でも最も有名な作品である。この曲は第3幕の四重唱「美しい恋の娘よ "Bella figlia dell'amore"」を元に作られている。美しい旋律や繊細なパッセージが対話を描き、多声部が美しく絡みあっている。最後は華麗なオクターブのパッセージで締めくくられる。1859年に弟子のハンス・フォン・ビューローのため書かれたものである。

【 小崎 麻美 (ピアノ) Asami KOSAKI 】

国立音楽大学鍵盤楽器専修ピアノ科を卒業。在学中ニース国際音楽アカデミーにてイヴ・アンリ、ミハイル・ルディ、ナンシー国際音楽祭にてローラン・カバツ各氏のマスタークラスを受講し、ソロ・室内楽で各音楽祭の演奏会に出演。第81回ソロ・室内楽定期演奏会出演。第一回新人発掘オーディション奨励賞受賞。2006年ミラノのカーサ・デ・ヴェルディにて日伊交流コンサートに出演。また古楽においては2009年オーディションに合格し古楽の森コンサートにアンサンブルで出演。2008～2011年国立音楽大学バッハ演奏プロジェクトに通奏低音で参加しマスタークラスやコンサートにおいて演奏。2010年3月にモンテヴェルディのオルフェオを自主公演し好評を博す。これまでにピアノを河村初音、戸引小夜子、日下部憲夫、チェンバロ・通奏低音を渡邊順生、大塚直也、有田千代子、ソルフェージュ・和声学を川島素晴の各氏に師事。日本音楽舞踊会議青年会員。



## 6. 高松 久美子 (ソプラノ) 山木 千絵 (ピアノ)

V. ベッリーニ : 6つのアリエッタ より「優しい妖精、マリコンニアよ」  
Vincenzo Bellini : Marinconia, ninfa, gentile, "6 Ariette da camera"

カプレーティ家とモンテッキ家 より「ああ、幾たびか」  
Oh! Quante volte, oh! Quante, "I Capuleti e i Montecchi"

◇ Marinconia, ninfa, gentile —— 1829年に出版されたベッリーニの歌曲集《6つのアリエッタ》の第一曲目。Marinconiaとは憂鬱やもの悲しさを意味する。物憂げな恋人を男を惑わす美しい妖精に例えて、多くを望まず愛の喜びで幸せに生きられるという愛の歌。

◇ Oh! Quante volte, oh! Quante ———— 舞台は13世紀、ヴェローナ。「ロミオとジュリエット」を題材にしたオペラ《カプレーティ家とモンテッキ家》のジュリエッタのアリア。カプレーティ家の娘ジュリエッタは、敵対するモンテッキ家の息子ロメオと密かに愛し合っている。しかし彼女の父が許すはずもなく、他の男との結婚を勝手に決めてしまう。この曲は、愛してもいない相手と今日

にも結婚と言われ、ウエディングドレスを着せられたジュリエッタが一人自室にこもり、愛するロメオを思いながら自分の運命を嘆き悲しみ歌う。ベッリーニによる美しくも儂げな旋律がより一層の悲しみをそそる名曲である。



【高松 久美子（ソプラノ）Kumiko TAKAMATSU】

フェリス女学院大学音楽学部声楽学科卒業。桐朋学園大学音楽学部声楽研究科修了。「声楽の夕べ」「卒業記念演奏会」に出演。花島雅子、牧川修一、山下美樹の各氏に師事。kiの会会員。愛するこどものうたのシリーズに出演。

【山木 千絵（ピアノ）Chie YAMAKI】2頁前参照

## 7. 成田 真依子（ピアノ）

S. プロコフィエフ : 東の間の幻影 Op. 22

Sergei Sergeevich Prokofiev : Visions fugitives, Op.22

No. 1、2、4、5、7、8、9、11、16、14

プロコフィエフ(1891-1953)が24~26歳の2年間にかけて作曲した、短い20曲からなる小品集。第7曲「ハーブ Arpa」以外には標題が付いておらず、いずれの曲も「幻影」という言葉が持つイメージさながら、ふっと目の前から消えていくような雰囲気漂う。この曲集が完成した1917年はまさにロシア革命の年であり、銃声の鳴り響く動乱の真只中であつた。タイトルの「東の間の幻影 Visions Fugitives(仏)」は、ロシア象徴主義の詩人であるコンスタンチン・バリモント(1867-1942)の詩「私は叡知を知らない」の第3、4行目から示唆を得て付けられた。

「私には 人のためになる知恵などない  
東の間の時を詩に注ぎ込むだけだ  
東の間の時 それぞれに私は世界を見る  
移ろう 虹色の戯れに満ちた世界を」

【 成田 真依子 (ピアノ) Maiko NARITA 】

埼玉県立熊谷女子高校、東京音楽大学ピアノ科卒業。同大学院科目等履修修了。第1回熊谷ひばりピアノコンクール奨励賞。

第5回さくらの街熊谷ガラコンサート出演。これまでに野島康一郎、草川宣雄、土屋絵里の各氏に師事。現在、えびすいピアノ教室講師。



8. 木下 晶人 (ヴァイオリン) 安宅 薫 (ピアノ)

サン=サーンス /イザイ編 : ワルツ形式の練習曲 Op. 52-6「カプリス」

Charles Camille Saint-saëns : Caprice after a study in form of a waltz Op.52-6

(Transcribed by Eugene Ysaÿe)

サン=サーンスは、1877年に(第2曲のみ1868年作曲)ピアノのための「6つの練習曲」を作曲した。これらは、「前奏曲」「指の独立のための」「前奏曲とフーガ」「リズムの練習曲」「前奏曲とフーガ」「ワルツ形式の練習曲」からなり、各曲それぞれ別のピアニストに献呈されている。この第6曲の「ワルツ形式の練習曲」は、当時のピアニストのマリー・ジャエルに献呈された。ピアノの難技巧を駆使した作品であり、演奏会で単独で演奏される事も多い。今回演奏するのは、ベルギー出身の大ヴァイオリニスト、ウジェーヌ・イザイがこの「ワルツ形式の練習曲」を、ヴァイオリン用に編曲したものである。原曲と同様に極めて技巧的に書かれており、ヴィルトゥオーゾ・ピースとしてよく知られている。サン=サーンスの洗練された優雅な曲想と、ヴァイオリンの持つ華やかな性格がイザイによって巧みに生かされており、原曲に勝るとも劣らない魅力を持っている。



【 木下 晶人 (ヴァイオリン) Akihito KINOSHITA 】

桐朋女子高等学校科(男女共学)を経て、桐朋学園大学を卒業。

現在、桐朋学園音楽大学音楽学部研究生、桐朋オーケストラアカデミーに在籍。第6回全日本芸術コンクール関東本選第2位入賞。

2013年度京都音楽家クラブ新人演奏会、関西桐朋会主催の第47回新人演奏会に出演。草津夏期国際音楽アカデミー、ミュージックセミナーin TOMASU, Summit Music Festival (ニューヨークSMF)、

クールシュベール夏期国際音楽アカデミーにてマスタークラスを受講。

これまでに伊藤かすみ、辰巳明子、恵藤久美子の各氏に師事。

【安宅 薫 (ピアノ) Kaoru YASUMI】

桐朋高校音楽科、桐朋学園大学音楽学部ピアノ科卒業。2013年3月まで 弦楽科嘱託演奏員を勤める。イタリアトリエステのセルジオロレンチ国際室内楽コンクールにて、石岡久乃とのピアノデュオで第2位受賞。現在桐朋学園大学付属子どものための音楽教室別科講師。



司会【佐藤 光政 Mitsunasa SATO】

1966年東京芸術大学音楽学部卒業。1973年第7回パリ国際音楽コンクール入賞。同年、第42回日本音楽コンクール声楽部門第1位入賞。1990年《春琴抄》でフィンランドのサヴォリンナ・オペラフェスティバルに参加。第18回ジロー・オペラ賞受賞。1994年に2枚組CD『佐藤光政 日本の抒情を歌う』を発売。2000年に、『日本の名歌を歌う』を発売。磯谷威、大槻秀元、柴田睦陸、河本喜介の諸氏に師事。二期会、日本オペラ協会、日本音楽舞踊会議、各会員。



昨年開催の「若い翼によるCMDJコンサート5」のステージ写真

# 会と会員の情報

## CMDJ 会と会員のスケジュール

### 11 月

- 2日(土) 並木桂子 (Pf.) 原宿・週末のひとつとき～癒しのモーツァルト&情熱のベートーヴェン1～モーツァルト ピアノソナタ K. 281 きらきら星変曲  
ベートーヴェン ピアノソナタ“悲愴” 他  
【原宿アコスタジオ 19:00 3,500円(小学生、学生割引有り)  
お問合せ:080-3003-2102 アラバスク】
- 3日(日) 広瀬 美紀子 (Pf.) ピティナ宮古ステップ・トークコンサート出演  
リスト:メフィストワルツ・北條直彦編曲:ピアソラ:リベルタンゴ他  
【宮古島 響和楽器店ホール 無料 時間未定】
- 8日(金) 若い翼による CMDJ コンサート6【すみだトリフォニー小ホール】  
(詳細は本誌掲載プログラム参照願います。)
- 10日(日) 広瀬 美紀子 (Pf.) 「第32回ホームコンサート」  
出演:北村真紀子(青年会員) リスト:メフィストワルツ他  
【八王子音楽院 京王校 10:30～ 1,000円】
- 11日(月) 深沢亮子 (Pf.) 一翔の会公開レッスン  
【10:00～日比谷スタインウェイサロン】
- 17日(日) 機関誌『音楽の世界』編集会議 14:00～会事務所
- 25日(月) 深沢亮子 (Pf.) 共演:本田昌子 モーツァルト:2台のピアノのための協奏曲 F-Dur K. 242 指揮:新田 孝 オーケストラ:NIPPON SYMPHONY  
【文京シビックホール 18:30 問合せ:090-6927-3447】
- 30日(土) 笠原たか (Sop) 共演:橋本寿子 (Vn) 古川由美 (Pf) 「至福のバッハ」  
私の喜ばしい心・主よあわれみ給え(マタイ受難曲より)(ソプラノ)他  
【京都文化博物館 18:00～ 3,000円(当日3,500円)】

### 12 月

- 1日(日) 作曲:橋川琢 詩と音楽を歌い奏でるトロッタの会 18  
Biotope III <<庭園幻想～祈りの歌>>室内アンサンブルと花による(改訂初演) op. 49 b 【早稲田奉仕園スコット 18:00～当日3,500円】
- 2日(月) 並木桂子 (Pf.) 共演:岸洋子 (Pf.) 印田千裕 (Vn.) 松葉春樹 (Vc.)  
関森温子 (Sop.) アレンスキーの肖像 Vol. 1 2台ピアノの為の組曲 第1、2番、ピアノトリオ第1番、歌曲 【杉並公会堂(小) 19:00 3,500円  
(小学生、学生割引有り) お問合せ:080-3003-2102 アラバスク】
- 6日(金) 深沢亮子とその仲間による“ピアノと室内楽の夕べ”  
出演:深沢亮子 (Pf.) 恵藤久美子 (Vn.) 安田謙一郎 (Vc.)  
助川敏弥: Gismonda (2010～2011)、ちいさきいのちのために(2004)  
モーツァルト: ピアノトリオ G-Dur K. 564  
ミヨー: ヴァイオリンとチェロのためのソナチネ Op. 324  
モーツァルト: ピアノトリオ C-Dur K. 548 【音楽の友ホール 19:00】
- 8日(日) 栗栖麻衣子 (Pf.) 他出演ーぴあの×ぴあの～2台ピアノによるコンサート  
リスト:交響詩前奏曲、ラフマニノフ:組曲第2番、ブラームス:ハイドンの主題によるヴァリエーション、2台8手、2台12手作品他  
【熊谷文化創造館さくらめいと太陽のホール一般2000円/高校生以下1500円 問合せ:事務局 080-3310-4238 日本音楽舞踊会議後援事業】
- 19日(木) ピアノ部会総会【新宿タカノ5階集合 11:00～】
- 19日(木) ピアノ部会主催 ベートーヴェン=ヴァイオリンソナタ第1番ソナタ  
レクチャー 講師:北川暁子 ヴァイオリン:北川靖子

受講者：2楽章 北村真紀子 【北川靖子スタジオ（野方）18:00～20:00】

1・3楽章受講者募集中：問い合わせ戸引(03-3381-6691・090-2255-6181)

20日(金) 機関誌『音楽の世界』編集会議 19:00～会事務所

21日(土) 大矢絢子(青年会員) ピアノリサイタル:

シューベルト: ピアノソナタ第21番変ロ長調 D960 他

【Hakuju Hall 13:00 開演 13:00 3,500円】

問合せ: 新演奏家協会 03-3561-50

2014年

### 1月

18日(土) 深沢亮子 (Pf.) 共演: 瀬川祥子 (Vn.) 水谷川優子 (Vc.)

モーツァルト ピアノとVnのためのソナタ e moll K.304

シューベルト アルペジオーネ・ソナタ a moll D-821

シューベルト ピアノ・トリオ No1 B-Dur D-809

【新宿住友ビル7F 朝日カルチャーセンター16:00

問合せ: 朝日カルチャーセンター03-3344-1945】

19日(日) 声楽部会公演「2014年 新春に歌う～夢と希望と、そして・・・」

【すみだトリフォニー小ホール 14:00】

### 3月

9日(日) 深沢亮子ー レクチャーコンサート Mozart と Wien

【スタジオ・コンツェルティーノ 問合せ: 042-729-4698】

10日(月) 邦楽部会コンサート(仮称)【すみだトリフォニー小ホール(詳細企画中)】

28日(金) 深沢亮子ー 共演: エール・カルテット Dvorjak ピアノ五重奏曲

【久米美術館 18:00 問合せ: 日壇協会 03-3468-1244】

### 4月

10日(金) フレッシュコンサート 2014【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

### 5月

26日(月) 作曲部会公演 【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

### 6月

13日(金) ピアノ部会公演【オペラシティリサイタルホール(詳細未定)】

### 7月

7日(月) 声楽部会公演【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

### 9月

25日(木) CMDJ2014 オペラコンサート【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

### 10月

23日(木) 20世紀以降の音楽とその潮流 “様々な音の風景 XI”

【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

## 会員のみなさまへ

ご案内 上記スケジュールにゴシック体で記載されている本会主催事業には、会員・青年会員・準会員・賛助会員・CMDJ 友の会の方は会員証呈示で無料または会員割引料金でご入場頂けます。

スケジュール原稿募集 会員の皆様の活動予定を無料掲載させて頂きます。演奏会に限らず、出版、講演等も「音楽の世界・会」と会員のスケジュール欄掲載希望」として日本音楽舞踊会議事務所までメールまたは Fax でお知らせ下さい。

○お知らせの際は、①〇月〇日(曜日)②会員名 ③催し物(出版物等)名④メインプログラム一曲名、もしくは公演・講演の内容を一つ ⑤【開催場所】、開演時間、入場券価格、等の順番でお書きください。

## 編集後記

9月には諸井誠氏、先月には三善晃氏、昭和30年代から我が国の作曲界をリードして来た昭和一ケタ生まれの作曲界の重鎮があとを去りました。二人の作風は大きく異なりますが、一世を風靡した二人の作曲家の逝去は、なんともいえない寂しさを感じさせます。

ところで、今年は夏が暑かったせいか、季節の変化が半月ほど遅れているようで、例年9月に来襲することが多い台風が、10月になってさかんに来襲して来ています。それでも、10月も終わりに近づくとさすがに気温も下がって来て、そのせいか私は風邪をひいてしまいました。しかし、秋は芸術の季節であり、本会も、10月の「様々な音の風景X」、11月の「若い翼によるCMDJコンサート」、12月の「ピアノと室内楽の夕べ」と立て続けにコンサートを開催します。どうぞ、本会のコンサートを聴いて、心身ともリフレッシュして風邪など吹き飛ばしてください。(編集長：中島洋一)

### 本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長：中島洋一 副編集長：橘川琢 高橋通 湯浅玲子

編集部員：新井知子 浦富美 大久保靖子 栗栖麻衣子 小西徹郎 高島和義 高橋雅光  
戸引小夜子 北條直彦

### 音楽の世界 11月号(通巻 553号)

2013年11月1日発行 定価 500円(本体 476円)

発行人：英二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6 寿美ビル 305 Tel/Fax: (03) 3369 7496

HP: <http://cmdj1962.com/> E-mail: [onbukai@mua.biglobe.ne.jp](mailto:onbukai@mua.biglobe.ne.jp)

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> (アーカイブ)

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03) 3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04) 7185 0471

購読料 年間: 5000円 (6ヶ月: 2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

\* 日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております

\* 乱丁、落丁がございましたらお取替えします